

日本独文学会

2016年 秋季研究発表会

研究発表要旨

2016年10月22日(土)・23日(日)

第1日 午前9時50分より

第2日 午前10時00分より

会場 関西大学 千里山キャンパス

第1学舎5号館

目次

第1日 10月22日(土)

シンポジウム I (10:00~13:00) A会場 (E601 教室)

〈プラハのドイツ語文学〉再考

Neue Perspektiven der *Prager deutschsprachigen Literatur*

司会：三谷 研爾

1. マウトナーからカフカへ —多言語状況の痕跡 川島 隆
2. 世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア 中村 寿
3. カフカにみる「チェコ」文学との交点
—ニェムツォヴァーとランゲルを介して 阿部 賢一
4. ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる 〈プラハのドイツ語文学〉継受 島田 淳子

シンポジウム II (10:00~13:00) B会場 (E602 教室)

日本の大学におけるコミュニケーションなドイツ語の教科書

—教師・学習者・使用の実践から考える—

Kommunikativ orientierte DaF-Lehrwerke an japanischen Universitäten

— Lehrende, Lernende und Unterricht

司会：藤原 三枝子

1. ドイツ語圏で出版された教科書に対する教員の意見と使用の問題
—アンケートの量的・質的分析結果を総合的に考える—
Meinungen über im deutschsprachigen Raum erschienene Lehrwerke und Probleme bei deren Verwendung im Unterricht – Ergebnisse der quantitativen und qualitativen Analyse einer Umfrage unter DaF-Lehrenden in Japan 梶浦 直子・Elvira Bachmaier
2. コミュニケーションな教科書を用いたカリキュラムの事例
—教師と学習者への働きかけ— 鷺巣 由美子
3. コミュニケーションな教科書に対する学習者の認知
—学生の外国語学習観、学習環境に対する認知から探る— 藤原 三枝子
4. 教師のビリーフ（信念）と授業実践
—コミュニケーションな教科書を使用するドイツ語教師の視点から— 森田 昌美

シンポジウム III (10:00~13:00) C会場 (E603 教室)

聖と俗の *foi & triuwe*

—中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」—

Das Heilige und das Profane im mittelalterlichen Treuebegriff

— *foi* und *triuwe* in der höfischen Literatur —

司会：渡邊 徳明

1. triuwe の語義について 嶋崎 啓
2. ゲネレンとクリエムヒルトの誠実なる裏切り
—彼らの悪魔的異形性をめぐって— 渡邊 徳明
3. 12世紀オイル語文学における「信義」 高名 康文
4. 『パルチヴァール』における triuwe の多様性 松原文
5. ミンネ歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデにおける triuwe 伊藤 亮平

シンポジウム IV (10:00~13:00) D会場 (E402 教室)

〈かけがえがない〉とはどういうことか？
—近現代ドイツ語圏文学における交換（不）可能性の主題
Was die Dinge wert sind?
— Problematiken der Ersetzbarkeit und Unersetzbarkeit

司会：由比 俊行

1. クライスト『拾い子』における〈交換／代理〉の諸相 由比 俊行
2. シュティフターの『アプディアス』における〈かけがえのない〉存在
—「等価／不等価交換」の観点から 藤原 美沙
3. 聖槍としての貨幣
—ジンメル『貨幣論』における「高貴性」の概念について 宇和川 雄
4. 身体を経済化させるものとしての言説
—E. イェリネク『動物について』 福岡 麻子
5. かけがえのない自己と交換可能な臓器
—ダーヴィット・ヴァーグナー『生命』について 熊谷 哲哉

ポスター発表 (13:00~14:30) H会場 (E203 教室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

ビルダーボーゲン作品の世界 —ブッシュとメッケンドルフアー

酒井 友里・宇佐美 幸彦

母語による聖書の是非

—聖書翻訳から考える三言語の中のルクセンブルク語

木戸 紗織

ポスター発表 (13:00~14:30) I会場 (E201 教室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Der Gemeinsame Europäische Referenzrahmen und der Deutschunterricht in Japan

— eine kritische Bestandsaufnahme

Maria Gabriela Schmidt / Alexander Imig

ブース発表 I (14:00~15:30) F 会場 (E205 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

「光線」と「闇線」のディスクール ―ゲーテ色彩論における実験の再評価

Diskurs vom Licht und Finsternis. Wiederentdeckung der Goetheschen Farbenexperimente

糸川 麻里生・Olaf Müller

ブース発表 II (14:00~15:30) G 会場 (E204 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

第一次世界大戦とエキゾチズム

―シュニッツラー、ロート、ムージルが描く異郷(国)の女性―

徳永 菜摘野・依田 哲朗・宮下 みなみ

口頭発表：文学 I (14:30~17:05) A 会場 (E601 教室)

司会：津田 保夫・木野 光司

1. 『歌』から『指環』へのハーゲン像の変化 野内 清香
2. 『恋愛禁制』における社会批判 ―ワーグナーとハインリヒ・ラウベ― 加藤 恵哉
3. ヴィーラントのシェイクスピア翻訳におけるテキストへの介入について 菅 由紀子
4. 19世紀の伝説集に見るヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』の反響

馬場 綾香

口頭発表：文学 II (14:30~16:25) B 会場 (E602 教室)

司会：孟 真理・山本 佳樹

1. 予見的批評とミメシス ―フリードリヒ・シュレーゲルの詩学における追構成の原理 胡屋 武志
2. アルフレート・デーブリーシ『たんぼぼ殺し』における狂気表象について 籠 碧
3. 文学における瞬間と永遠 ―ピカートのヘーベル解釈を手掛かりに 石井 亮治

口頭発表：文学 III / 語学 I (14:30~17:05) C 会場 (E603 教室)

司会：田村 和彦・増本 浩子

1. 朗読・アクション・テキスト
―トーマス・クリングの詩作における伝達のストラテジー 林 志津江
2. ポストメディアム状況における文学
―セリーム・エツドガンの二つのメディア小説について 林 寄 伸二
3. Vom Klang der Sinn oder vom Sinn der Klang. Zur performativen Komik lyrischer
Begriffsarbeit Claus Telge

4. Deutsche und japanische Substantivzusammensetzungen im Vergleich

Simon Oertle

口頭発表：語学Ⅱ（14:30～17:05）D会場（E402教室）

司会：宮下 博幸・吉村 淳一

1. 談話標識 *Weißt du was?* に関する歴史語用論的考察
— 説教集, 戯曲, 小説, 映画における話しことばに注目して 佐藤 恵
2. ドイツ語の完了助動詞選択 藤井 俊吾
3. ドイツ語形容詞 *egal* における総称性 — 与格の生起をめぐって 井口 真一
4. 主語と文域 — 二重判断・単純判断の視点から 藤縄 康弘

口頭発表：ドイツ語教育 / 文化・社会（14:30～17:05）E会場（E403教室）

司会：羽根田 知子・福岡 麻子

1. ドイツ語母語話者・学習者間の多人数インタラクション
— 「聞き返し」と発話の協働構築プロセス 星井 牧子
2. ウィーン工房の初期デザイン
— 異質なものの文化的摂取, 混交, 排除の一例として 高井 絹子
3. アドルノにおけるハイネ像 — 「知識人」としての自己理解という観点から
橋本 紘樹
4. ナチズムは「アジア的」行為か
— 歴史家論争 30 年, アジアからの再考の試み 渡辺 将尚

ブース発表Ⅲ（16:00～17:30）F会場（E205教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

Das Image des Fremdsprachenunterrichts bei Deutschlernenden am Beginn des ersten Studienjahres
Carsten Waychert

ブース発表Ⅳ（16:00～17:30）G会場（E204教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

ICT 総合ドイツ語学習環境について — 海外研修での活用と多言語化の試み —

川村 和宏・竹内 拓史・松崎 裕人

第2日 10月23日(日)

シンポジウムV (10:00~13:00) A会場 (E601 教室)

Architektur als Gestaltungsprinzip des Imaginären
in Literatur und Kunst

Moderator: Thomas Pekar

1. Der (Un-)Wille zur Architektur. Kōjin Karatani über Wittgenstein und Christopher Alexander
Walter Rupprechter
2. Imaginierter Glanz und flüchtiges Zuhause. Speisesaal in der Großstadtliteratur des 20. Jahrhunderts
Kikuko Kashiwagi
3. Architektonische Macht im Nationalsozialismus
Thomas Pekar
4. Weinen und Onanieren im Keller. Aspekte eines architektonischen-poetologischen Chronotopos in der Gegenwartsliteratur
Hiroshi Yamamoto
5. Architexturen der Transparenz. Glas als Material einer urbanen Moderne
Michael Wetzel

シンポジウムVI (10:00~13:00) B会場 (E602 教室)

心態詞はなぜ使われるのか? —心態詞の出現する状況と認知—
Warum verwendet man Modalpartikeln? Situationen und Kognition

司会: 田中 慎

1. 心態詞の義務性をめぐって —実証的アプローチ— 大藪 正彦
2. 心態詞の感情伝達機能 —心態詞とその生起環境の分析— 宮下 博幸
3. 「驚き」に関する心態詞と終助詞の比較 —心を読ませるための手がかり— 岡本 順治

シンポジウムVII (10:00~13:00) C会場 (E603 教室)

時代を映す鏡としての雑誌
—18世紀から20世紀の女性・家庭雑誌に表われた時代の精神を辿る—
Zeitschriften im Spiegel des Zeitgeistes
—Die Frauen- und Familienzeitschriften vom 18. bis zum 20. Jahrhundert

司会: 桑原 ヒサ子

1. 貞節と理性 —マリアンネ・エールマン『アマーリエの休息時間』が提示する女性の自己陶冶— 北原 寛子
2. 『ガルテンラウベ』 —大衆化する活字メディアとその「政治性」— 竹田 和子
3. 『ナチ女性展望』 *NS Frauen Warte* —女性による女性のための雑誌— 桑原 ヒサ子
4. フォーラムとしての家庭欄 —東ドイツの人気週刊誌『Wochenpost』にみる女性像の変遷— 重野 純子

5. 非政治性の政治性 ―戦後西ドイツにおける女性雑誌 *Constanze* の誌面分析

横山 香

シンポジウム VIII (10:00~13:00) D 会場 (E402 教室)

「人殺しと気狂いたち」の饗宴
あるいは戦後オーストリア文学の深層
Das Symposium unter Mördern und Irren
oder die Tiefe der österreichischen Nachkriegsliteratur

司会：前田 佳一

1. オーストリアにおける「ドイツ国民叙事詩」研究
―『ニーベルンゲンの歌』における「オーストリア性」
山本 潤
2. 「この時代」の文化批判 ―ムージルの「カカーニエン」とアウストロ・ファシズム
桂 元嗣
3. 訪れない「戦後」 ―L. W.ロホワンスキーによるオーストリア文学再編の試み
日名 淳裕
4. ハイミート・フォン・ドーデラーにおける「間接的なもの」の詩学
前田 佳一

第1日 10月22日(土)

シンポジウムI (10:00~13:00)

A会場 (E601 教室)

〈プラハのドイツ語文学〉再考

Neue Perspektiven der Prager deutschsprachigen Literatur

司会：三谷 研爾

〈プラハのドイツ語文学〉の研究が1960年代のチェコスロヴァキアで本格化してから、ほぼ半世紀が経過した。この間には、東西冷戦の終結という大きな転換があり、それによってなにより一次資料へのアクセス環境が激変した。忘れられていた作品や作家の発掘が着実にすすむ一方、多民族都市プラハの歴史的・社会的状況、作家たちが直面した言語的・文化的アイデンティティの危機、境界的存在としてのユダヤ系知識人の位置といった問題をめぐって、検証と分析が蓄積されてきている。

2000年代に入ると、作家以外の知識人、とりわけ大学を拠点にした人文系研究者の政治的・文化的な言動にまで考察が及ぶとともに、モラヴィアやズデーテンといったプラハ以外の地域で活動していたドイツ語作家たちの再評価もまた本格化しつつある。いずれも、一次資料の掘り起こしからはじめて、1890~1945年のボヘミア・モラヴィアにおけるドイツ文化とチェコ文化の摩擦・拮抗・併存を、よりローカルかつミクロな次元で検討する作業である。

こうした現状は、研究の深化や成熟といえる反面、議論が一定の飽和点に達した結果、新たな素材探索に向かっている途上ともいえる。研究の精緻化や細分化をフォローアップすることは不可欠だが、それだけが唯一の道ではない。むしろこの時点でこそ、今後取りうるいくつかの方向性を作業仮説的に設定し、それぞれの意義と射程、さらにはその相互関係を検討することで、〈プラハのドイツ語文学〉研究の可能性とアクチュアリティを積極的に問いたい。

以上の問題意識にもとづき、1) 個別作家研究へのフィードバック、2) ユダヤ文化研究としての展開、3) チェコ文学との相関、4) 1945年以降における継承、という4つの軸を立てて議論をおこなう。

1. マウトナーからカフカへ —多言語状況の痕跡

川島 隆

ドゥルーズとガタリがカフカ文学を手がかりに提起した「マイナー文学」の概念は、これをカフカ以外の〈プラハのドイツ語文学〉の作家たちにも敷衍した Scott Spector (2000) や、プラハの枠を超えてズデーテン・ドイツ文学にまで拡大適用しようとした Christian Jäger (2005) の研究などにより、多言語状況下で営まれる文学活動を捉える枠組として定着している。だが、当のカフカ自身の文学を同時代プラハの多言語状況に引きつけて解釈するのは容易ではない。彼が残した文学的テキストにおいては、他のプラハのドイツ語作家たちの作品を特徴づける多言語状況の描写が欠落している、あるいは周到に消し去られているからである。

本報告では、カフカの親世代にあたるプラハ出身のドイツ語作家フリッツ・マウトナーがプラハとボヘミアの地方都市を舞台にドイツ語とチェコ語の衝突を描いた『ブラトナ最後のドイツ人』(1887)を補助線としてカフカの長編断片『訴訟』を読むことで、〈プラハのドイツ語文学〉研究で得られた知見をカフカの作品研究へとフィードバックすることをめざす。もとより言語問題に起因する民族衝突を目のあたりにして育ち、勤務先ではドイツ語とチェコ語の二重使用を常としていたカフカが、複数の言語のぶつかり合いや摩擦といった問題に無関心でいられたはずはない。そうした言語の布置が、彼のテキストにいわば「痕跡」として残存していることを、マウトナー作品との比較を通じて浮き彫りにしたい。

2. 世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア

中村 寿

世紀転換期プラハのユダヤ人のうち、その圧倒的多数はドイツ語を話す〈ドイツ系ユダヤ人〉であった。ところが、ボヘミア王国領ではチェコ系ユダヤ人の数がドイツ系を大幅に上回っているという状況があった。ドイツ系ユダヤ人が少数派に転じているなかで、ドイツ文化の優位性を擁護し続けるブルジョワの同化主義に疑義を呈したのが、ユダヤのナショナリズム／シオニズムである。ユダヤ系ドイツ語メディアの一例として、反同化主義の宣伝媒体として創刊された週刊新聞『自衛』(1907-1938)を取り上げる。

シオニズムはユダヤ民族を帝国の諸民族と対等な存在にすることを目指した。『自衛』は、ユダヤ民族に対する国民的権利の承認の贖いに、民族対立の調停者として、不正な民族支配を糾す番人になるという約束をした。その過程で、彼らは使命のひとつとして、ユダヤ民族による〈国民的〉同一性、文化・文学の新たな創造を挙げた。彼らはユダヤのナショナル・アイデンティティの構築が民族対立の解消に通じると考えていた。

本報告では、『自衛』の分析を通じて、シオニストがみずからをユダヤの文化の創造者、諸民族対立の調停者と定義し、演出しようとした過程を検証する。ナショナリズム媒体と文学との接点を呈示する作業を通じて、〈プラハのドイツ語文学〉への社会文化史的なアプローチの可能性を提案したい。

3. カフカにみる「チェコ」文学との交点 —ニェムツォヴァーとランゲルを介して

阿部 賢一

世紀転換期の「プラハ文学」という現象を捉えるにあたって、ヤナーチェクのオペラをドイツ語に訳したマックス・ブロートなど、ユダヤ系知識人がチェコ語とドイツ語世界の媒介役を担っていた事実は看過できない。また Marek Nekula の近年の論考が示すように、カフカにはチェコ語の運用能力があり、チェコ語の文学も愛読していたことが明らかになっている。

本報告では、このような文脈を踏まえ、カフカという作家がチェコ語文学とどのような関係性を築いていたか、とりわけ、「読書体験」ならびに友人との「交流関係」の

2点を中心に検討を行なう。前者に関しては、19世紀のチェコ語作家ボジェナ・ニェムツォヴァー(1820-1862)の作品との類縁性を検討し、後者については、ユダヤ系作家ゲオルク・ランガー(イジー・ランゲル, 1894-1943)との関係を中心に検討する。チェコの農村世界を具現化するニェムツォヴァーに対し、ガリツィアのハシディズムに傾倒したプラハの作家ランゲルは異なる文脈に位置する。本報告では、これら3者のテクストの相互参照を考察し、〈プラハのドイツ語文学〉の作家たちの活動とチェコ的な文脈との関係性を明らかにする。むろんチェコ的な文脈もけっして一義的なものではなく、よりミクロな文脈をいくつも内包した、多様な文化空間としてのプラハの姿を提示する。

4. ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈プラハのドイツ語文学〉継受

島田 淳子

本報告では、戦後ドイツ語で文学創作をおこなったチェコの作家レンカ・ライネロヴァーLenka Reinerová(1916-2008)とリブシェ・モニーコヴァーLibuše Moníková(1945-1996)の〈プラハのドイツ語文学〉に対する態度を比較し、19世紀末から両大戦間期にかけて開花したこの文学現象が戦後チェコでいかに受け継がれたかを考察する。プラハのドイツ語作家と同世代人であるライネロヴァーは、彼らの個々の作品内容以上に、この文学現象を支えた当時のプラハの多民族的環境に関心を寄せていた。彼女は、ホロコーストと戦後のドイツ系住民国外追放のすえ、単一民族化したチェコであえてドイツ語執筆を貫くことで、進行する文化的多様性の忘却に抗おうとしたと考えられる。

一方戦後生まれのモニーコヴァーは、1968年のチェコ事件後西ドイツに移住し、ドイツ語で文学創作を始めた。同時代のチェコの作家や芸術家と同様、彼女はカフカ文学に、共産主義社会に生まれた自分を取り巻く不条理な状況を投影していた。また外国語で執筆を行った彼女は、執筆言語への不確かさを胸に文学創作をおこなったとされるプラハのドイツ語作家にシンパシーを抱いていた。こうしたなかモニーコヴァーは、作中で〈プラハのドイツ語文学〉に対する自身の解釈を展開させ、それを現代的に読み替えていったのである。

以上のような作家の活動を考察することで、従来第二次世界大戦とともに終了すると考えられていた〈プラハのドイツ語文学〉の枠組を時間的に拡大する可能性を探る。

シンポジウムⅡ(10:00~13:00)

B会場(E602教室)

日本の大学におけるコミュニカティブなドイツ語の教科書

—教師・学習者・使用の実践から考える—

Kommunikativ orientierte DaF-Lehrwerke an japanischen Universitäten

— Lehrende, Lernende und Unterricht

司会：藤原 三枝子

文部科学省の『英語が使える日本人』の育成のための行動計画(2003)や「高等学校学習指導要領外国語」(2009)が示しているように、日本における英語教育の目的は明らかに実践的な運用能力の養成に向かっている。日本の大学において多くの場合、第二外国語として学習されているドイツ語においても、従来の文法や文法・訳読にのみ重点を置くものよりも、いわゆるコミュニケーションの要素も取り込んだ「総合教材」の出版が増えている。日本独文学会が実施した「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」において、2014年の、教師と学習者を対象とした質問紙調査では、64.3%の教師が、調査対象クラスにおいて文法を重視していること、その一方で半数を超える教師は(50.6%)、「日常的な会話」に重点を置いていることが分かった(複数回答可)。これは、1997年の日本独文学会ドイツ語教育部会の調査と比べると、教師が学習者の口頭コミュニケーション能力養成にも力を注ぐようになったことを示している。また、学習者は、これまでの多くの調査で、文法・訳読中心の授業よりも会話中心あるいは4技能の総合的な養成を目指す授業を希望しているものの、2014年の学会調査では、望ましい教材としては、「日常会話が多い教材」(58.3%)と「文法を理解し、文章が読めるようになる教材」(54.1%)が、ほとんど同じ程度で支持されている(複数回答可)。

このように、言語知識を重んじる文法・訳読型の授業・教材と、言語の使用を重視するコミュニケーション型の授業・教材の双方が、教師側にも学習者側にも支持されている。こうした一見矛盾するような状況において、近年使用が増えているコミュニケーション型の教科書を、ドイツ語圏で出版されたものだけでなく日本で出版されたものを含め、教師と学習者はどのように受け入れているかを、体系的に調査研究することの意味は大きい。

教師と学習者を結ぶ重要な媒体である教材ほど、授業に影響を及ぼす要因はない(Neuner 1994: 8, Rösler 2012: 47)と考えられるにもかかわらず、これまで十分に調査研究が行われてこなかった。とりわけ、教師の外国語の授業に対する持続的・安定的な信念(ビリーフ)が、使用する教科書の評価にも深くかかわり(森田 2011)、学習者の教科書の評価にも影響を与えている可能性が大きいにもかかわらず、教師を対象とした研究は、管見の限りまだ少ない。

本シンポジウムは、ドイツ語の運用能力の養成を主要な目的とする教科書をテーマとし、統一教材としての使用実践(鷲巣)、教師に関する調査(梶浦・Bachmaier, 森田)、学習者を対象とした調査(藤原)の3つのアプローチにより、日本の大学におけるドイツ語の授業においてコミュニケーション型の教科書を使用する可能性と問題点を探ることを目的としている。

5. ドイツ語圏で出版された教科書に対する教員の意見と使用の問題

—アンケートの量的・質的分析結果を総合的に考える—

Meinungen über im deutschsprachigen Raum erschienene Lehrwerke und Probleme bei deren Verwendung im Unterricht – Ergebnisse der quantitativen und qualitativen Analyse einer Umfrage unter DaF-Lehrenden in Japan

梶浦 直子・Elvira Bachmaier

2014年に日本独文学会が実施した「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」の報告書によると、主な教材として91%の教員が市販の教科書を授業で使用していた。しかしながら、その多くは日本で出版された教科書であり、ドイツ語圏で出版された教科書の使用との間に大きな差があることがわかった。

日本における教科書研究では、日本で出版された教科書の分析、あるいは、ドイツ語圏で出版された教科書を利用したコミュニカティブな授業実践報告が多い。しかし、教科書に対する教員の見解を問う、大規模な調査が実施されたことは、発表者の知る限りない。そこで、なぜドイツ語圏で出版された教科書があまり使用されていないのかを調査する目的でアンケートを実施した。

調査は、2015年12月から2016年1月までとし、Web上のアンケートサイトを利用して実施した。調査内容は、教員に関する項目、ドイツ語圏で出版された教科書の使用に関する項目、ドイツ語圏で出版された教科書に対する意見を5件法、さらに、自由記述で問う項目から構成された。日本独文学会の会員から、無作為に抽出した400名に調査協力を依頼し、その結果、136名から回答を得た。

本発表では、量的調査、質的分析結果から総合的に、ドイツ語圏で出版された教科書使用の難しさがどこに起因するかを明らかにするとともに、日本の学習文化において効果的に使用するための課題を検討したい。

6. コミュニカティブな教科書を用いたカリキュラムの事例

—教師と学習者への働きかけ—

鷲巢 由美子

発表者の勤務先では、履修者の学習動機と目標、外国語カリキュラムの教育目的、時間的制約などの理由で、コミュニカティブな教科書をドイツ語クラスの共通教科書として使用している。

教科書は、教師および学習者がその特徴に即して使わなければ、効果を十分に挙げることはできない。中でもコミュニカティブな教科書は、コミュニケーション状況、言語機能、文法、語彙等が有機的に組み合わせられているため、教師がその構成を十分に理解した上で、教科書のコンセプトに沿った形で使用する必要がある。また学習者は、ペアワークへの積極的参加など、教科書が要求する態度で学習しなければならない。教科書の構成や各タスクの意味を理解した上で学習することも重要である。このような状況を形成するために、教師に対しては手引書配布や説明会などを行ない、学習者に対しては（教師を通じた働きかけの他に）副教材を配布している。

非常勤教員と学生双方に対して行なった調査から、教師・学習者の大半が、教科書が学習目標に合致すると評価していることがわかった。また大半の学生が学習の到達目標に達してもいる。

一方で批判もある。教師からは構成がわかりにくい、タスクが単調、時間不足だといった指摘がある。学習者の中には、ごく少数だが、文法事項が「少なすぎる」あるいは「多すぎる」と不安を感じる者もいる。いずれも我々にとって今後の課題であるが、大半の問題は解決可能だと考えている。

7. コミュニカティブな教科書に対する学習者の認知

日本のドイツ語教科書は，近年，「聞く・話す」の口頭コミュニケーション能力も学習目的とするものが増加し，加えてドイツ語圏で出版された教科書を使用する教師も徐々に増えているように思われる。

日本独文学会が 2014 年に実施した調査では，学習者は，従来の言語知識を重んじる文法・訳読型の教材と，コミュニケーションの手段としての言語の使用を重視するコミュニカティブな教材の双方を，同程度に支持していた。こうした一見矛盾するような状況において，近年使用が増えているコミュニカティブな教科書のコンセプトを学習者がどのように受け入れているかを探るために，ドイツで出版されたもの，日本で出版されたもの各 2 冊，合計 4 冊を使用する学習者に対して質問紙調査を行った。2015 年 6 月～7 月の第一回目調査に参加した 1,535 人の学生の質問紙を統計的に分析した結果，こうした教材はおおむね肯定的に受け入れられているが，コンセプトの評価は，「対人コミュニケーションに関するスキルを学びたい」という学習者の希望だけでなく，「文法学習に対する態度」，「学習環境の認知」に影響を受けていること，加えて，学習者間で評価にかなりのばらつきがあることが分かった。

本シンポジウムでは，学習者がコミュニカティブな教科書をどのように受け入れているかを，彼らの外国語学習観，学習環境に対する認知を中心に，質問紙の量的・質的分析およびインタビュー調査の分析結果を基に発表する。

8. 教師のビリーフ（信念）と授業実践

—コミュニカティブな教科書を使用するドイツ語教師の視点から—

森田 昌美

言語教師についての研究は，教育学や社会学，心理学における教師研究と異なり，必ずしも長い歴史をたどっているとは言えない。80 年代から 90 年代半ばにかけて，研究者たちの目は「学習者」へ向けられ，より良い教授法を求めて模索が続けられたが，授業改善は容易に進まなかった。90 年代半ば，上記の諸科学からの理論的な支援も受けつつ，言語教育の改革をめざそうとした時，教育における教師の果たす役割を再認識しようという議論が活発化してきた。その際，特筆すべきは従来の研究者側の「外からの視点」によって教師を見るのではなく，教師たち自身の「内なる視点」に注目したことにある（Duxa 2001, Caspari 2003）。

本発表の研究対象は，日本とドイツで出版された 4 冊のコミュニカティブな初級教科書を使用する教師たちである。2014 年度は予備調査として，先の教科書を使用する教師 1 名ずつ合計 4 名を，本調査の 2015 年度は教師 2 名ずつ 8 名を訪ね，授業参観とインタビューを行った。前者の予備調査については，2016 年 3 月 6 日の「言語教育エキスポ 2016」（早稲田大学）で，授業参観のデータを中心に研究発表を行っている。

本発表では，2015 年度の本調査で対象とした 8 人の教師のビリーフと授業実践について扱う。今回は教師の言語学習歴，教授歴，教員研修，授業環境といったファクターにも触れながら，教師の「内なる視点」に焦点を当て，その葛藤と達成感を探り，言語教師の認知研究における一考察としたい。

シンポジウム III (10:00~13:00)

C会場 (E603 教室)

聖と俗の *foi & triuwe*

—中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」—

Das Heilige und das Profane im mittelalterlichen Treuebegriff

— *foi* und *triuwe* in der höfischen Literatur —

司会：渡邊 徳明

中高ドイツ語の *triuwe*(誠実)は、聖俗の両方に意味づけられた。a)神への絶対的で一方通行的な服従を表す宗教的 *triuwe*, b)人間同士の間の「ギブ・アンド・テイク」、相互契約に介在した世俗的 *triuwe*, とにである。ジャンルによって、作品によって、異本によって、「誠実」概念が a), b)どちらに意味づけられるか揺れた。

古高ドイツ語で、*triuwe*(*triuwa*)は宗教的な文脈で用いられ、主に神に対する一方的・絶対的服従を表した。しかし、時代が下って宮廷文学最盛期の13世紀初頭になると、人間関係を表す際の用例の方も目立ってくる。13世紀初頭成立の『ニーベルングンの歌』では、主従の間で双方向的な *triuwe* が介在し、ある種の相互契約的な関係が認められる。ここに *triuwe* は世俗的性格を帯びる。

その一方で、12, 13世紀の中高ドイツ語世俗文学では *triuwe* に宗教的含意が加わった例も確かに確認できる。『ローラントの歌』には神への *triuwe* の用法が見出されるし、同時に悪魔的なイメージと結びついた「不誠実」(*untriuwe*)という言葉も多用される。

この関連で興味深いのはフランス語原典とされる『ロランの歌』で、「誠実」(*foi*)が宗教的な意味では用いられず、専ら主従間の「忠誠」という世俗概念でしかないことである。つまり、この物語はドイツ語圏に入った段階で初めて宗教的色彩を帯びたと推測できる。もっとも物語をドイツ語に翻案したのは僧侶だから、当時フランスの叙事詩がドイツ語に翻案されて「誠実」概念に宗教性が強まった、と一般化するのには早計だろう。

しかし、フランス語原典がドイツ語に翻案された際、神聖なる存在への帰依を表す内面性の強い *triuwe* が世俗文学作品の主題としてクローズアップされた例は他にもある。『パルチヴァール』ではフランス語原典にはない「誠実」の概念が主要テーマとされた。そこには神への絶対的誠実が強調される。

同時にこの作品での誠実はキリスト教的なものに限定されない。1200年前後の宮廷文学において、*triuwe* 概念は聖俗二領域の境界線上に位置する微妙な意味付けがなされたのである。『パルチヴァール』において誠実の主体には実に異邦人・異教徒まで含まれた。

宮廷文学の本質は、騎士道・貴婦人への奉仕・宗教的な内面性、の三位一体であり、その中核に *triuwe* 「変わらぬ心」が置かれた。それを端的に表すミンネザング(恋愛歌謡)には、神への *triuwe* にも似た、貴婦人に対する騎士の、下から上への一方的で絶

対的な奉仕が描かれる。しかしここでも、**triuwe** は揺れを見せる。恋愛歌人ヴァルターは恋愛に男女の相互契約的で対等な関係を要求した。その際 **triuwe** はもはや神聖なる価値を有さず、世俗的なギブ・アンド・テイクの対象にまで変貌を遂げたのである。

1. **triuwe** の語義について

嶋崎 啓

triuwe の語義は「忠義」や「誓い」、「約束」など一見多義的に見えるが、それらすべては広い意味での「誠意」に還元できる。その際注意すべきは、日本語の「忠義」、「忠誠」などに含意される下の身分の人間から上の身分の人間への「誠意」を **triuwe** は表すだけでなく、上から下への「誠意」も表すということである。例えば、『ニーベルンゲンの歌』の一つの主題はハゲネの主君に対する **triuwe** であるが、実際の **triuwe** の用例を見ると、様々な人間関係で **triuwe** が用いられており、その中には上の身分の人間から下の身分の人間への「誠意」を表す例も多く、**triuwe** という語自体は上下関係を表さない。ただし、古高ドイツ語の **triuwa** (> **triuwe**) は「信仰」を意味する **fides** の訳語として使われたのが最初であり、このようなキリスト教の「聖」における「信仰」と対人間の「俗」における「誠意」とが、どのように意味的に関連するのかが問われる。この問いに対する一つの答えは、**triuwe** は「変わらぬ心、裏切らぬ心」を表すという平凡なものであるが、**triuwe** がそのように中立的な意味を持つからこそ、向けられる対象によって上下関係が新たに生成されるのであり、人から神への「信仰」の方が「俗」における上下関係を問わない「誠意」よりも下から上への上下関係を表すという逆説めいた現象も生まれると考えられる。

2. ゲネレンとクリエムヒルトの誠実なる裏切り

—彼らの悪魔的異形性をめぐって—

渡邊 徳明

『ローラントの歌』のゲネレンと『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルトは共にキリスト教徒であるのに、異教の軍勢に加担して、出身部族のキリスト教徒たちを裏切る。両者とも意識的に仲間を裏切るのだが、その一方で、両者ともある種の **triuwe** を一貫して持ち続ける。「誠実なる態度をもって不誠実を行う」帰結は、両人物の宗教的・政治的立場の中間的性格・矛盾に起因する。そしてこのような矛盾した立場こそ、彼らに悪魔的な異形のイメージを付与し得る。ゲネレンの「裏切り」は悪魔の仕業と理解されるが、それはクリエムヒルトにもある程度、当てはまるのではないか。「裏切り」の誘発者としての悪魔はしばしば人間と獣の特徴を併せ持つ異形として描かれたが、そのようなイメージこそ、二人の矛盾した立場を視覚的に表現し得うるものだ。

もっとも、両者には決定的な違いもある。ゲネレンの裏切りについてはキリスト教徒の側から見て一義的に不誠実とされ、悪魔の介在が強調されるが、キリスト教徒である親族らを殺してゆくクリエムヒルトには、13世紀当時、「悪魔の女」というレッテルが貼られる一方で、前夫に対する一貫した誠実を称える声もあった。僧侶によって書かれ宗教的色彩の濃い『ローラントの歌』と、その後のシュタウフェン朝の宮廷

騎士文学の影響を色濃く受け世俗性・多義性を強めた『ニーベルンゲンの歌』との文学的な質の違いが表れている。

3. 12世紀オイル語文学における「信義」

高名 康文

ラテン語の *fides* は、第一に人同士の「信義」を意味したが、ウルガータで神への信義を表す言葉としても用いられるようになった。ところが、『ロランの歌』に現れる *feid*、形容詞 *fidelis* を語源とする *fedel* の 10 ほどの用例には、神への信仰と言い切れるものはない。さらに意外なことに、ロランの異教徒との戦いと死の場面には、これらの語は一度も使用されない。

神への信義が語られるのは、この作品で *fedel* の反意語として用いられている *felon* を介してである。いよいよ危機に陥った際に、ロランが全軍に「殉教するのでなければ、(神に対して) 不忠になる」と述べる台詞がある。*felon* は、低地フランク語の「皮剥職人」を意味する語に由来し、「卑しくて残酷」という意味だったのが、12世紀封建社会において「不忠な」の意味を持った。*infidèle* の出現は14世紀である。この事実は、この時代のオイル語の体系において、神への信仰が、主君と臣下の「信義」のアナロジーとして語られていたということの意味しないか？

以上のように、語彙研究の成果を参照しつつ、オイル語圏における俗語文学の誕生の時期に、人への「信義」と神への「信義」がそれぞれ、どのような局面において、どのように語られていたかを概観するのが、本発表の目的である。クレチアン・ド・トロワの『ペルスヴァル』もとりあげるべく準備を進めていきたい。

4. 『パルチヴァール』における *triuwe* の多様性

松原 文

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハは『パルチヴァール』において *triuwe* という語を多用した。原典とされるクレチアン・ド・トロワの『ペルスヴァル』には対応する語がなく、ヴォルフラム独自の構想と考えられる。なお『パルチヴァール』より約四半世紀早く、最初にクレチアンの作品をドイツ語に翻案したハルトマン・フォン・アウエもまた、騎士の徳に関する記述を独自に付け加え、その一つとして *triuwe* を挙げている。13世紀初頭、フランス文化の影響下でドイツ語の宮廷文学が花開いたとき、より理念的な騎士道の描写が目指され、その中で *triuwe* という概念が重視されたのだ。

triuwe は『パルチヴァール』のテーマであり、その 250 近い用例数と多様性は際立っている。神と人、王と臣下、親族、男女など、聖俗上下のさまざまな関係の「誠実」がすべてこの語で表される。ただし、注目すべきは具体的な指示内容の拡大だけではない。宮廷世界を描いた他作品では比較的調和している *triuwe* の社会性(契約性)と内在的な道德性の二側面が、錯綜しはじめたことが特徴である。宮廷社会の外部で生まれ育った主人公や聖杯、異教世界が登場したことにより、*triuwe* の前提条件が多様化したためである。例えば主人公の *triuwe* の喪失は、どの社会のいかなる要請を怠ったことを指しているのか？あるいは道德の問題なのか？話者や場面によっても

triuwe の扱い方は異なる。『パルチヴァール』研究はその不安定性の解釈に取り組み続けている。

5. ミンネ歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデにおける triuwe

伊藤 亮平

ミンネザングの世界では、男性より女性の方が優位な立場にあり、男女の対等な関係が成立しているとは言い難い。しかし、報われないにも拘らず、愛を貫くことを意中の女性に訴え続けるからこそ、男性は「変わらぬ心」を表す triuwe という徳をアピールできる。このように男性の triuwe は、女性に対する下から上への服従を前提とすることによって成り立つ。ミンネザングにおける triuwe の用例は、デア・フォン・キューレンベルクらの初期ミンネザング（1160～1170 頃）にはほとんど見られず、フリードリヒ・フォン・ハウゼンやラインマル・デア・アルテら盛期ミンネザングの歌人のリートに多く出現することから、triuwe の用例数の増加は、男性の心変わりのなさが求められる「高きミンネ」概念の発展との関連性が深いことが読み取れる。ところが、ヴァルターは盛期ミンネザングに属する歌人でありながら、たゆまず女性に奉仕し続ける「高きミンネ」のあり方に異を唱え、己の奉仕に対する返礼を女性に求める。彼は「変わらぬ心」という聖的なものより、「約束の実行」という対人関係の世俗的な triuwe 概念を強調する。ヴァルターが男女の相互的な関係を求めて、従来のミンネザングにおける男女関係の前提に揺さぶりをかけたことは、実質的に「変わらぬ心」という、ミンネザングの世界の中核概念である聖的な triuwe をも揺るがすことを意味したのである。

シンポジウム IV (10:00～13:00)

D 会場 (E402 教室)

〈かけがえがない〉とはどういうことか？

—近現代ドイツ語圏文学における交換（不）可能性の主題

Was die Dinge wert sind?

– Problematiken der Ersetzbarkeit und Unersetzbarkeit

司会：由比 俊行

人間は一人ひとりが〈かけがえのない〉存在である——近代市民社会を基礎づけるこの観念をひとつの倫理的価値として定式化したのが、たとえばカントだった。「価格をもつものは、別の等価のものと取り替えることができる。これにたいしてすべての価格を超越しているもの、いかなる等価のものも認めないものは、尊厳をそなえているのである。」（『道徳形而上学の基礎づけ』）

一般に、個人の〈かけがえのなさ〉は、経済的な等価交換原理の対極にある交換不可能なものの価値であると見なされる。しかし、交換可能なものと交換不可能なものの境界は、決して一義的に定まっているわけではない。社会の資本主義化は個人を「労

働力」として交換可能にし、医療技術の進歩は〈かけがえのなさ〉そのものであるとさえ思える身体（部位）の交換や複製を可能にした。こうした現実を前に、個の〈かけがえのなさ〉という価値観は、今日様々な局面で根底的な問い直しを迫られている。だが振り返ってみると、そもそも〈かけがえのなさ〉は、本当に経済的な交換可能性と対立するものだったのだろうか。むしろ〈かけがえのない〉個人という観念こそ、どの個人もみな等しく「人間」であるという等価性、その限りにおける「人間の交換可能性」を背景にして生まれてきたものではなかったか。

本シンポジウムは、以上のような問題意識から出発して、19世紀以降のドイツ語圏文学における〈かけがえのなさ〉をめぐる言説を問題化するものである。第一発表者の由比は、クライストの『拾い子』(1811)を取り上げ、作品世界を特徴づける〈交換／代理〉のモチーフの両義的な役割を明らかにする。第二発表者の藤原は、シュティフターの『アプディアス』(1842)における、〈かけがえのなさ〉の形成と喪失の意味を問う。第三発表者の宇和川は、『貨幣の哲学』(1900)をはじめとするジンメルと貨幣論を手がかりに、貨幣経済の発展と〈かけがえのないもの〉をめぐる言説との連関を示す。第四発表者の福岡は、イエリネクの演劇テキスト『動物について』(2005)を取り上げ、人間および身体の「交換」可能性という主題が、いかなる言語的手法によって問題化されているのかを浮き彫りにする。第五発表者の熊谷は、ダーヴィット・ヴァーグナーの自伝的小説『生命』(2013)を扱い、「臓器移植」にまつわる〈かけがえのないもの〉と「交換可能」なものとの関係を考察する。

以上の発表を通じて、本シンポジウムでは、19世紀初頭から現在にいたるまで、〈かけがえのなさ〉が「交換可能性」との関連においてどのように位置づけられてきたのか、その歴史的変遷を跡づける。もちろん、5名の発表でそのすべてをカバーすることはできないが、続くディスカッションで議論をさらに深め、〈かけがえのなさ〉をめぐる言説の問題圏を浮かび上がらせることを目指したい。

1. クライスト『拾い子』における〈交換／代理〉の諸相

由比 俊行

本発表では、ハインリヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) の『拾い子』*Der Findling* (1811)を取り上げ、同作における〈交換／代理〉のモチーフについて考察する。『拾い子』は、ペストを患って死んだ息子の「代わり」に養子ニコロを迎えたことを契機に、ローマの富裕な土地商人ピアーキの一家が破滅してゆく過程を描いた作品である。すでに多くの研究者によって指摘されてきたように、この物語における市民的家族を特徴づけているのは、家族の構成員たちの間に張り巡らされた〈交換／代理〉の関係性である。そこでは、家族のメンバー全員が、それぞれにとって近しかった他者（死者）の〈代理〉として位置づけられる。従来の研究では、この〈交換／代理〉によって成立した家族を崩壊へ向かわせる要因として、しばしば養子＝拾い子ニコロの抱く〈かけがえのないもの＝交換／代理されえないもの〉に対する欲望が挙げられてきた。だが、物語を破局へ導くニコロの行動は、〈かけがえのないもの〉になりたいという欲望の直接的な発露として描かれているわけではない。養母の密かな愛の対象である死者コリーノの肖像と寸分たがわぬ衣装に身を包み、この死者に「なり代わって」養母を犯そうとするニコロの行動は、むしろ過剰なまでの〈交

換／代理)の行為として描かれている。本発表では、このニコロの特異な行動を手がかりに、『拾い子』における〈交換／代理〉のモチーフがもつ意味を明らかにしたい。

2. シュティフターの『アプディアス』における〈かけがえのない〉存在 —「等価／不等価交換」の観点から

藤原 美沙

アーダルベルト・シュティフター (Adalbert Stifter, 1805-1868) の『アプディアス』 *Abdias* (1842) において、盲目の少女ディータは、利己的な商人であった父親アプディアスの〈かけがえのない〉存在として成長していくが、最終的には雷によって唐突に命を奪われる。本発表ではこの一連の流れを、同時代の貨幣経済ならびに倫理観における「等価交換／不等価交換」に対する認識を基軸としながら捉え直し、本作における〈かけがえのなさ〉の形成と喪失の意味について考察する。

シュティフターは同時代の変化を文学作品に顕著に投影することのない作家だと言われている。(Geulen 1993) しかし本作に見られる〈不等価なもの交換〉、あるいは〈贈与〉のやり取りは、産業革命以降貨幣経済の支柱となる等価交換原理を意識したうえで、あえて強調したものだと捉えることができる。それは人間関係における〈かけがえのなさ〉の描写にも顕著にあらわれており、父アプディアスから盲目の娘ディータへの一方的な献身は、やがて視力を獲得する娘から父への全幅の信頼と愛情によって応じられ、二人の関係性は強固なものとなっていく。

本発表では以上の点に着目し、アプディアスにとってディータの〈かけがえのなさ〉が段階的にいかに変容していくのかを検証しながら、彼らの関係性がしかし至高のものとしては称揚されず、最終的には雷という自然の〈偶然〉によってディータの命が奪われる世界観の意味を明らかにしていきたい。

3. 聖槍としての貨幣 —ジンメルの貨幣論における「高貴性」の概念について

宇和川 雄

本発表では、19 - 20 世紀転換期に書かれたジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) の『貨幣の哲学』 *Philosophie des Geldes* (1900) を手がかりに、〈かけがえのないもの〉をめぐる言説が貨幣経済の発展のなかでどのように成立したのかを考察する。ジンメルによれば、「貨幣はわたしたちの時代の神になった」という嘆きは、あらゆるものが貨幣によって交換可能になりその全能性が神の如く崇められるようになった時代に、〈かけがえのないもの〉が見失われていることに対する嘆きにほかならない。殺人賠償金・奴隷制・売春の歴史は、事物のみならず人間もまた貨幣と等号で結ばれうることを示している。ではお金にかえられない、〈かけがえのないもの〉とは何か。ジンメルはそれを「高貴性」と呼ぶ。「高貴性」とは「ある魂が自己完結した独自の形式をもつこと」であり、それはまた個の「無比性」あるいは「交換不可能性」とも言い換えられている。このジンメルの貨幣論は「貨幣の経済学」(Flotow 1995) の範疇には収まらない。なぜならそこで問題になっているのは経済現象としての貨幣の機能ではなく、人間の生にとっての貨幣の意味だからだ。貨幣は人間の最も固有な価値である

「高貴性」を傷つける。ジンメルはしかしその傷を嘆くだけではなく、貨幣が自らつけた傷を癒す聖槍としての力をもつことも指摘している。〈かけがえのないもの〉の喪失と引き換えに、わたしたちは何を得るのか。本発表ではジンメルの貨幣論のなかにその答えを探る。

4. 身体を経済化させるものとしての言説

—E. イェリネク『動物について』

福岡 麻子

本発表では、エルフリーデ・イェリネク (Elfriede Jelinek, 1946-) の演劇テキスト『動物について』 *Über Tiere* (2005) を主な例として、近年のドイツ語圏文学が、人間やその身体の「交換」可能性ないし不可能性をめぐる言説とどのように取り組んでいるか、その一端を示す。

「経済」はイェリネクにおける主要なテーマの一つであるが、彼女は経済事象を作品の題材としているだけでなく、恋愛や家族をはじめとする種々の人間関係やそこでの振る舞いを、経済によって方向づけられるものとして描出している。特に「交換可能なものとしての人間」(Sauter 1983) は、彼女が初期から批判的に取り組んでいる主題の一つである。

その中心にあるのが、人間やその身体の交換可能性が性差によって規定されるモメントを問題化するという作業である。高級娼婦斡旋業者をめぐる裁判を契機として書かれた『動物について』もこの系譜にあり、性的な身体を「交換する」という営み、またそれを支える数多の言説を問いに付している。本発表では、身体を(性的)商品へと形成する言語的過程が作品においてどのように問題化されているか、また翻って、人間やその身体を「交換不可能なもの」とする言説にはどのように取り組まれているのかを考察する。

5. かけがえのない自己と交換可能な臓器

—ダーヴィット・ヴァーグナー『生命』について

熊谷 哲哉

本発表では、肝臓移植手術を描いたダーヴィット・ヴァーグナー (David Wagner, 1971-) の自伝的な小説『生命』 *Leben* (2013) を中心に、臓器移植という行為が、移植を受けた本人の自己意識にどのような変化をもたらすのかという点に着目する。そして、臓器移植というある種の交換行為は、現代社会においてどのような意味を持つのかを明らかにする。

『生命』には、主人公の、免疫性肝炎による数十年にわたる闘病生活と、臨死体験、さらに肝臓移植手術による生還と回復のプロセスが描かれている。移植された臓器とは、他者から得られたものであり、自身の臓器と取り替えられたものである。単なる物の交換ではなく、それが生きている人間と死んでゆく身体との間で行われるという点に特徴がある。『生命』では、主人公が臓器提供者の人物像を想起しながら、臓器を自身に受け入れようとする過程が描かれ、自己の生命が他者との共生のなかで成立していることが示されている。一方で、臓器移植という医療行為は、偶然性にも左右さ

れる。偶然によって命を落とす（臓器の提供者となる）こともあれば、偶然によって生き延びる（臓器を得る）人間もいる。

これらの論点について本発表では、モースの『贈与論』(1924)などを参照しながら、交換可能な臓器をどのように自己の身体の一部として捉えることができるのか、その際自己のかけがえのなさという概念にどのような揺らぎが生じるのかという点について考察する。

ポスター発表 (13:00~14:30)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

H会場 (E203 教室)

ビルダーボーゲン作品の世界 —ブッシュとメッゲンドルファー

酒井 友里・宇佐美 幸彦

ビルダーボーゲンは石版または木版の版画と説明のテキストとを組み合わせた一枚刷りの印刷物である。19世紀のドイツにおいて大衆的な娯楽・情報メディアとして大量に発行された。ドイツ各地に印刷所があったが、ミュンヘンのブラウン・ウント・シュナイダー社の発行したものが「ミュンヘン一枚絵」(Münchener Bilderbogen)としてよく知られている。この出版社からヴィルヘルム・ブッシュ(1832-1908)は合計50点、ローター・メッゲンドルファー(1847-1925)は64点の作品を発表した。本発表の目的は、ブッシュとメッゲンドルファーのそれぞれの制作技法の特徴を明らかにすることである。本発表の意義は、ビルダーボーゲン作品の代表的な具体例を検討することにより、①19世紀の大衆文化の実態を示すこと、②ビルダーボーゲンを現在のマンガ文化の一つのルーツとして歴史的に位置づけること、③古典的なジャンルを変革し、ダダイズムなど20世紀初頭の前衛的な創作方法(ジャンルの破壊、同時進行的手法など)を萌芽的に先取りした創作活動の実例を示すこと、である。ブッシュとメッゲンドルファーの基本的な相違は、とりわけ物語の内容において、前者が既存の社会規範に批判的であるのに対して、後者は概して現状肯定的であり、教訓的な方向性へのこだわりが強いという点にあると思われる。

母語による聖書の是非

—聖書翻訳から考える三言語の中のルクセンブルク語

木戸 紗織

人が生まれて初めて習得する言語を母語という。この母語は、思考や人格と結びついており、最も自由な表現の手段であることから、母語で聖書を読むことは聖書翻訳の動機の一つとなってきた。

ルクセンブルクでは、長らくドイツ語訳やフランス語訳の聖書を用いていたが、母語で聖書を読みたいという声を受け、2009年にルクセンブルク語による新約聖書 *Evangeliar* が刊行された。ところが、この翻訳には賛否両論あり、その争点は、聖書に「親しみやすさ」と「権威性」のどちらを求めるのか、という点に集約される。そ

ここで本発表では、いくつかの日本語の聖書を用い、両者の見解をより詳しく理解することを試みる。まず、ルクセンブルク語訳聖書の受容状況を確認し、次に日本語訳の例として新共同訳聖書、口語訳聖書、そして二つの方言訳聖書（ケセン語訳聖書、大阪弁訳聖書）を読み、親しみやすさや権威性について、様々な言語的背景を持つ参加者と意見交換を行う。ここで得られた意見は、随時ポスターに反映させる予定である。そして、ルクセンブルク語訳聖書に見られる賛否が、日本語においてもすべての翻訳に共通するものなのか、それとも一部の翻訳にのみ見出されるものなのかについて検討し、これをもとにルクセンブルク語の現状について参加者とディスカッションを行う。最終的には、方言訳と標準語訳の比較を通して、三言語併用におけるルクセンブルク語と他の二言語の関係性についても考察したいと考えている。

ポスター発表 (13:00~14:30)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

I会場 (E201 教室)

Der Gemeinsame Europäische Referenzrahmen und der Deutschunterricht in Japan – eine kritische Bestandsaufnahme

Maria Gabriela Schmidt / Alexander Imig

Der gemeinsame europäische Referenzrahmen für Sprachen (GeR, japanische Übersetzung Yoshijima & Ohashi 2004) kann im Bereich DaF in Japan weitestgehend als bekannt gelten. Bisher wurden Studien von Sakai (2013), Sugitani (2012), Krause-Ono (2010), Fujiwara (2003) u.a. vorgelegt, die auf verschiedene Aspekte des GeR im Deutschunterricht in Japan eingehen. Weil es jedoch wenig offenliegende Hinweise auf die Anwendung des GeR im Bereich der deutschsprachigen Fremdsprachenvermittlung in Japan gibt, möchte diese Präsentation eine kritische Bestandsaufnahme der aktuellen Situation anhand von folgenden Leitfragen vorlegen: (1) Welche Aspekte des GeR sind in Japan publizierten Lehrwerken umgesetzt?; (2) Wo wird/ wurde der GeR in den schulischen/ universitären Curricula für Deutsch umgesetzt (mit Einzelfallstudien verschiedener Universitäten)?; (3) Wie wirkt sich der GeR auf die Rolle der zweiten Fremdsprachen aus (Standardisierung, externe Prüfungen)?; (4) Wie wird die Rolle des GeR von den Lehrenden eingeschätzt? Dazu sollen Ergebnisse einer Pilot-Umfrage unter Deutschlehrenden in Japan vorgestellt werden. Es geht insbesondere um die Identifizierung von Erwartungen und Desiderata an den GeR ebenso wie mögliche Hindernisse bei dessen Umsetzung. Dieser Beitrag wird sich daher auch der Frage der Diskrepanz zwischen der fachwissenschaftlichen Diskussion des GeR, der Position der deutschen Sprache in einem Mehrsprachigkeitskonzept sowie der Notwendigkeit der Curriculumsreform widmen.

電子板書を導入したプレゼン型ドイツ語授業モデル

山崎 明日香

本発表は、新メディアを導入したドイツ語文法授業において、従来のアナログ板書中心から、電子板書に比重をおいた授業モデルを報告するとともに、その移行で生じた問題点を検証するものである。PC、タブレット、スマートフォン、OHC、電子ノート、電子黒板、Moodleなどの新しいデジタル機器やツールは、近年、教育現場に積極的に導入されている。報告者は、これらの電子媒体を一般的なドイツ語文法授業に導入することで、ヴィジュアルを通じた高い教育効果を実現し、学習者の課題の遂行時間を増やしたのみならず、教授上のコストを削減した。だが、こうした効率化が見られる傍ら、クラスの受講態度に考慮すべき点が観察された。本発表では、「Teaching」型の授業から、「Presentation」型の授業に移行するなかで指摘される、様々な問題点とその解決策を模索する。

日本独文学会の「ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査」(2015)によると、国内のドイツ語文法講座においては、授業環境のデジタル化が遅れている。本実験の調査によると、大多数の受講者が、授業の電子化に肯定的な評価をした。また、授業内容の理解において、アナログ板書とデジタル板書の間には差は見られなかった。実証実験では、電子板書の導入による教授コストの削減だけではなく、ペーパーレスの推進や、健康被害の回避(チョークの粉塵吸引による)に効果が見られた。だが、電子資料を「Just in time」形式で電子配布するには、受講者側の電子環境の整備と意識の変化が今後の課題になるだろう。

ブース発表 I (14:00~15:30)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

F会場 (E205 教室)

「光線」と「闇線」のディスクールーゲーテ色彩論における実験の再評価

Diskurs vom Licht und Finsternis. Wiederentdeckung der Goetheschen
Farbenexperimente

桑川 麻里生・Olaf Müller

In den letzten beiden Jahrzehnten interessieren zwar immer mehr Forscher sich für Goethes Farbenlehre, nicht nur im Gebiet der Germanistik, sondern auch in denen der Philosophie, Psychologie, Kognitionswissenschaft usw., aber nur wenige versuchen, die Experimente, die Goethe in seinen Schriften beschrieben hatte, in die Praxis umzusetzen. Man sollte doch eigentlich diese Experimente durchzuführen, um die Naturforschung von Goethe, die es als „zarte Empirie“ darstellen wollte, zu verstehen. In unserem Vortrag wollen wir wichtige Forabenexperimente von Goethe wiederzugeben und noch einige damit vergleichbare vorzustellen, damit man zeigen kann, dass seine Wissenschaftstheorie nicht bloß als Kritik an die modernen Naturwissenschaften, sondern als eine richtige Tradition der Naturwissenschaften und der Philosophie betrachtet werden soll.

Es ist gut bekannt, dass bei Goethes Farbenlehre die Polarität zwischen Licht und

Finsternis vorausgesetzt sei, aber Ingo Nußbaumer(2008) hat als der erste darauf aufmerksam gemacht, dass Goethe die Betrachtungen nicht nur über den Lichtstrahl, sondern auch über den „Finsternisstrahl“ anstellte, wobei man die Finsternis nicht als „Abwesenheit vom Licht“ verstehen soll. Die Versuche von Nußbaumer setzt Olaf Müller(2015) im philosophischen Kontext fort, indem er über die Goethesche Farbenexperimente erneut diskutiert. Im Vortrag werden wir wichtige Farbenexperimente vorstellen und versuchen, die Betrachtungen über die beiden Strahlen und die Polarität zwischen Licht und Finsternis in die wissenschaftstheoretischen Diskussion überhaupt zu erweitern.

ブース発表Ⅱ (14:00~15:30)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

G会場 (E204 教室)

第一次世界大戦とエキゾチズム

—シュニッツラー, ロート, ムージルが描く異郷(国)の女性—

徳永 菜摘野・依田 哲朗・宮下 みなみ

第一次世界大戦前のオーストリア=ハンガリー帝国の人々にとっての異質な存在は、以下のように分類できる。国境によって隔てられた「異国」と、帝国に属すが文化を異にする多民族が構成する「異郷」である。これまでエキゾチズムは、ドイツ語圏の文学研究においてテーマ化されることが少なかった。これを踏まえ Mayer (2010)は、ドイツ語圏におけるエキゾチズムの体験を描いた文学作品が、自己を相対化・脱構築する機能を果たしていたことを明らかにした。しかしこの研究において貫かれている、エキゾチズムをつねに非ヨーロッパ圏と関連付ける姿勢は必ずしも正当なものとはいえない。なぜなら帝国内部および周縁にも、エキゾチックな「異郷(国)」は存在していたからである。この帝国にとっての「異郷(国)」のエキゾチズムを意識化した文学作品が、第一次世界大戦を契機とし、帝国崩壊後のオーストリアにあらわれたのだった。

このような異質な存在のエキゾチズムは、特にアルトゥール・シュニッツラー『誘惑の喜劇』(1924)、ヨーゼフ・ロート『駅長ファルメライヤー』(1933)、ローベルト・ムージル『グリージャ』(1921)において野生性・神秘性・官能性といった特徴を備えた「異郷(国)」の女性として具現化される。これらの作品においては、このような「異郷(国)」の女性が、男性主人公の帝国臣民としてのアイデンティティを揺るがせ、異質な存在に対する優位性を失わせるのである。

口頭発表：文学Ⅰ (14:30~17:05)

A会場 (E601 教室)

司会：津田 保夫・木野 光司

1. 『歌』から『指環』へのハーゲン像の変化

野内 清香

13世紀に成立したとされる中高ドイツ語の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と、19世紀のヴァーグナーの『ニーベルンゲンの指環』四部作は、ニーベルンゲン伝承における双璧であるといえる。とりわけ現代のニーベルンゲン伝承の受容においては、ヴァーグナーによって創作された伝承の影響の大きさを無視することはできない。『エッダ』の「ニヴルング族の殺戮」や、『シズレクスサガ』のニフルンゲン国という名称が示すように、「ニーベルンゲン」は元来ブルグント族を指し、ニーベルンゲン伝承とはブルグント族の滅亡までを語るものであったはずである。しかし現在のニーベルンゲン伝承においては、英雄ジークフリートの死をもって結末とする『指環』型の作品が目立つ。それにともないニーベルンゲンの意味はブルグント族から切り離され、もっぱら超自然的な財宝の来歴と関連付けられる傾向が見られるのである。

本発表では、このヴァーグナーによる新たなニーベルンゲン伝承におけるハーゲン像について論ずる。『指環』の壮大な神話世界は、『歌』からだけではなく、北欧の古い伝承から多くの素材を得て創作されている。『歌』におけるジークフリート暗殺者でありその妻クリエムヒルトの復讐対象となる悲劇的英雄ハゲネの像が、『指環』においては神々の末裔ジークフリートと対決するニーベルンゲンの末裔ハーゲンに変化した様子を、素材の伝承と比較しながら検討する。

2. 『恋愛禁制』における社会批判 —ワグナーとハインリヒ・ラウベ—

加藤 恵哉

リヒャルト・ワグナーのオペラ『恋愛禁制』はワグナーが23歳のときの作品であり、シチリアの民衆に厳格な掟を強いるドイツ人代官フリードリヒが、自由で開放的な民衆に圧倒される姿を描いている。この作品のリブレットを執筆している時期、ワグナーは作家ハインリヒ・ラウベと活発に交流し、彼からヴィルヘルム・ハインゼの小説『アルディングロと幸福な島々』(以下『アルディングロ』と略記)を紹介されている。主人公の青年が閉鎖的な宮廷社会に背を向けエーゲ海に恋愛や性的関係の自由な理想郷を建設するというこの小説の内容は、『恋愛禁制』に大きな影響を与えている。

『恋愛禁制』は、ワグナーの音楽的特徴が完成される以前の初期作品であるため研究対象となることが少なく、先行研究はラウベからの影響については触れる程度であるが、私はこの作品に、ラウベや『アルディングロ』からの影響により成立したワグナー作品における社会批判の原点という研究の意義を見出す。

本発表は『恋愛禁制』をワグナーによる社会批判の試みと捉え、この作品における民衆と代官の対立構造がいかなる意味を持つかを検討する。その際、ラウベを含む作家たちがどのように『アルディングロ』を受容してきたかという背景を参照しつつ、『アルディングロ』における自由な主人公と不自由な社会の対立構造が『恋愛禁制』における対立構造にどのように影響を与えているかを明らかにする。

3. ヴィーラントのシェイクスピア翻訳におけるテキストへの介入について

ヴィーラントがドイツにおけるシェイクスピア受容史の中で果たした役割は大きい。なぜなら、シェイクスピアのほとんどの作品は 1760 年代にヴィーラントによって初めてドイツ語に翻訳され、それによってシェイクスピア作品はドイツにおいて多くの読者・聴衆を獲得したからである。しかし、ヴィーラントの翻訳には発表された当初から賛否両論があった。それは彼の英語の知識が不十分だったことに加え、彼が底本となるテキストから一部をカットしたり、韻文を散文に変えたりするなどの加工を施していたためである。本発表で焦点を絞るのは、ヴィーラントがシェイクスピアのテキストになした加工、特に特定の部分を選択的に排除していることについてである。先行研究では、ヴィーラントのテキスト介入の理由は、彼がシェイクスピア作品を古典主義の規範に従わせようとしたからであると説明されることが多い。しかし、この理由によって説明することのできないカットの箇所も数多くある。このことについて調べる際に重要なのは、ヴィーラントが手を加えた個所を正確に把握することであり、そのためには彼のテキストと彼が翻訳の際に底本とした版のシェイクスピアのテキストとの比較が必要である。当時イギリスで出版されたシェイクスピア作品集には編集者によってテキストに修正が加えられることが度々あったが、そうした修正がヴィーラントによる修正と取り違えられることが近年の研究でも起こっている。発表では以上の点に留意しながら、ヴィーラントのテキスト介入の多様な性質について論じる。

4. 19 世紀の伝説集に見るヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』の反響

馬場 綾香

19 世紀ドイツでは伝説集を刊行することが流行していた。本研究発表ではまず、この流行を数値的に裏付ける。伝説集は 19 世紀初頭からじょじょに盛んに刊行され始め、1830 年代から 1840 年代にかけて刊行数が大幅に増加している。次にこの増加の背景について、グリム兄弟の編著作との関係から考察する。ドイツにおいて伝説集という文献の祖型はグリム兄弟編『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen* (1816/1818)であるとされる。しかしその模倣はグリム兄弟の伝説集それ自体ではなく、兄ヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』*Deutsche Mythologie* (1835)の反響を通して広まった。伝説集刊行数の推移は、『ドイツ伝説集』よりも『ドイツ神話学』の影響が大きかったことを如実に示している。更に、『ドイツ神話学』登場後に刊行された伝説集の中では、各地方や領邦に対象地域を絞った伝説集が多数を占めている。各編者は当該地域の独自性を礼賛しつつ同時に「祖国ドイツ」への寄与を謳う。これは各地の伝承が集合体となって大きな「ドイツの神話」を構成するという構想を示唆するものである。19 世紀の伝説集に対する『ドイツ神話学』の影響は、献辞や出典としてグリムの名が挙げられるという意味に留まらない。「ドイツの神話」の理念をはじめ、「伝説」と「神話」に対する態度などにヤーコプの思想的影響が表れている。

口頭発表：文学Ⅱ (14:30~16:25)

B 会場 (E602 教室)

司会：孟 真理・山本 佳樹

4. 予見的批評とミメーシス

ーフリードリヒ・シュレーゲルの詩学における追構成の原理

胡屋 武志

アリストテレスは『詩学』の中で、歴史がすでに生起した個別的な出来事をそのまま記述するのに対して、詩作は、諸々の出来事をミュートスの機能によって総合することで、いまだ生起していない可能的にして必然的なものを描き出すミメーシスの行為であると言っている。初期ロマン派の思想家フリードリヒ・シュレーゲルが打ち出す批評の独自性は、彼が上述のミメーシス的な総合の方法を批評の概念の中に取り込み、批評が対象の再現による特性描写の行為として考えられている点にある。

本発表では、このような見解に基づいて、シュレーゲルの批評が有するミメーシス的な性格について、『批評の本質について』（1804）の中で批評の根幹の役割を担うとされる「追構成」Nachkonstruieren の概念に焦点を当てて考察する。その過程で明らかとなるのは、批評が、繫辞 werden を用いた命題「主体は対象になる」に示されるミメーシス的な構造を成立させることである。1804年に始まるケルン私講義の中でその歴史哲学の鍵概念となっている「生成」Werden の語が含意するのは、上記の命題の中で二者が結合する際の時間的構造である。すなわち、主体がいまだ対象でなかった過去とすでに対象である未来との間に存する矛盾・対立が werden によって現在の中で止揚され、両者は時間的に融合する。そこで批評は、過去に生起した対象を分解し、それらの要素を組み合わせて追構成し、主体そのものが対象へと変容することで、生成する世界の未知の様相を現在形で映し出す予見的な行為となるのである。

5. アルフレート・デーブリーン『たんぽぽ殺し』における狂気表象について

籠 碧

Anz (1977) によれば、表現主義において「精神障害者」は唾棄すべき市民社会の対極に位置する存在として称揚される。しかし Anz の、表現主義の機関誌に掲載された『たんぽぽ殺し』（1910）のフィッシャー氏もまた肯定的狂気表象の一つであるという見解は、多くの批判を招いた。ほとんどの研究者はむしろ、フィッシャーの狂気は、市民に内在する「攻撃性」という醜い特徴が病理的に肥大化したものだとして指摘する。狂気は称揚されるべきオルタナティヴとは程遠く、むしろフィッシャーが属する市民社会を軽蔑的に描くための否定的な表象に過ぎないという。Reuchlein (1991) は、精神医学を修めた作者の経歴にもかかわらず『たんぽぽ殺し』からは精神障害者に寄り添う医師的倫理観を期待できない、と述べる。

確かにフィッシャーが攻撃的で不快な人物として描かれているのは間違いない。しかし面白いことに、作者は少なくともその着想においてフィッシャーを「繊細」な人物として考えていた。事実テキストにおいて、示唆的に繰り返される「sehen」という単語に着目すれば、市民社会の衆目に追いつめられる「繊細」なフィッシャー像が浮かび上がる。とはいえこの繊細さは、Anz のいう称揚される狂人像の特徴とは明らか

に違う。

発表では同時代の精神医学言説も視野に収めながら、フィッシャーの人物像をより多面的に捉えることで、「精神障害者」に対する「称揚」とも「軽蔑」とも異なる距離の取り方を読み取ってみたい。

6. 文学における瞬間と永遠 —ピカートのヘーベル解釈を手掛かりに

石井 亮治

20世紀前半を中心にドイツおよびスイスで文筆活動をおこなった人物、マックス・ピカート(1888-1965)の手掛けた著作の中でも、とりわけ文学作品に対する言及が多くなされているものを中心にとりあげ、その内容を検討する。本発表では、ピカートがヨハン・ペーター・ヘーベル(1760-1826)の作品に対して長年好意的な評価を与えていたことに着目し、ここから彼の言語観や文学に対する立場を探ってみたい。

ピカートはその50年近い文筆活動の中で、古今様々な文学作品や詩、あるいはその作者について言及しているが、とりわけヘーベルに対しては、ゲーテやヘルダーリンにも劣らぬ高い評価を一貫して与えている。例えばピカートは、その主要著作の一つ、『ゆるぎなき結婚』(1943)第19章において、「時間をその長い持続と延長において表現し、この長い持続と延長のなかで永遠さえもがそこに姿をあらわす余地を持ち得るように、そのように愛情を表現すること……他のいかなる詩人にも成功しなかったこのことが、ヘーベルの物語の中で成就されたのである」と主張する。ここでピカートが指しているのは、ヘーベルが手掛けた暦物語の一つ「思いがけない再会」である。本章においてピカートは、瞬間的な「ロマンチックな愛」ではなく、長年のあいだ「同じものとしてとどまる愛」を文学的に表現することの難しさについて語るのだが、ピカートによれば、このことにただ一人成功したのがヘーベルなのだという。本発表では、この「思いがけない再会」という小編に対するピカートの評価を軸に、文学における時間の表現についての検討を行う。

口頭発表：文学Ⅲ / 語学Ⅰ (14:30~17:05) C会場 (E603 教室)

司会：田村 和彦・増本 浩子

5. 朗読・アクション・テキスト

—トーマス・クリングの詩作における伝達のストラテジー

林 志津江

トーマス・クリング(Thomas Kling, 1957-2005)は詩(Gedicht)ないし詩人(Dichter/Dichterin)概念の挑発的な拡張に挑み続けた詩人である。その大前提となるのは従来指摘されてきた通り、詩が声(Stimme)と文字(Schrift)の相関的な関係が現前するメディアであるという詩人の認識であろう。詩は聴覚的に知覚される声であると同時に、視覚的な言語テキストでもあり、この両者は一方が他方に還元される

ような関係ではありえない。またこうした詩人の問題意識の一翼は、詩人自身も再三言及しているように、表現主義やチューリヒ・ダダのパフォーマンス、ウィーン・グループの具体詩など、言語の物質性や空間的・時間的知覚の側面を重視した 20 世紀抒情詩諸派との徹底的な対決を通じ培われている。

その一方で、絶対詩や具体詩の担い手たちは周知の通り、言語の意味論的性質や伝達領域をどうとらえるかで立場を異にした。であるならば、クリングの言語活動においてそれらの諸問題はどのように扱われているのだろうか。クリングの強調する視覚や聴覚とは言語の物質的構成要素への還元と言えるのか。今回の発表では、クリングの詩作に反映される言語の意味理解や受容美学的側面、さらにはクリングの作品や活動のアクチュアリティについて、詩人の詩論的叙述ならびに実際の作品（文字テキストおよび朗読パフォーマンス）を参照しつつ考察する。

6. ポストメディアム状況における文学

—セリーム・エツドガンの二つのメディア小説について

林寄 伸二

美術批評家ロザリンド・クラウス(1999)に由来し、やや拡大解釈されてメディア研究等で使用される「ポストメディアム状況」という概念がある。この概念を、絵画、文学、音楽等の従来の芸術ジャンルの越境・融合を容易にする諸メディア混交の環境条件と捉えたとすると、遅くとも 60 年代には現れていたポストメディアム状況は、90 年代以降のマルチメディア環境の発展とその社会への浸透にしたがって、遅まきながら作家や文芸学者によっても意識されるか、彼らが無意識に規定するようになる。本発表の目的は、セリーム・エツドガンの小説『Zwischen zwei Träumen』(2009)と『DZ』(2014)を、上述の意味での「ポストメディアム状況」に対する文学的応答として読み、現代のメディア環境と文学の関係について考察することである。

『Zwischen zwei Träumen』で中心的な役割を果たしている目薬のようなメディア Tropfen は、言葉を介さない、あるいは言葉が二次的な役割しか果たさない、映像・音楽等の現代娯楽メディアの強度を全身感覚にまで高め、拡張したものとして構想されている。それに対して『DZ』では、あらゆる言語を理解できるようになるという薬物 wmk が重要なメディアとして登場する。エツドガンは、これらの虚構のメディアをめぐる人間模様を通じて近未来のメディア環境における人間に関する思考実験を行い、それと同時に、文学を衰退させかねない近未来のメディア表象を貪欲に取り込みながら、諸感覚に開かれた文学のあり方を模索しているのである。

7. Vom Klang der Sinn oder vom Sinn der Klang. Zur performativen Komik lyrischer Begriffsarbeit

Claus Telge

In den letzten Jahren zeichnet sich in der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur (etwa Cotten 2007 oder Rinck 2012) aber auch in der zeitgenössischen Philosophie (Avanessian 2014) – insbesondere im Berliner Umfeld – die Neigung ab, poetische und theoretische Begriffsbildung im lyrischen Sprechen verstärkt miteinander zu verbinden. Diese Wesensverwandtschaft ergibt sich aus der schlichten Prämisse,

dass ein Gedicht nicht da ist, um es zu verstehen, sondern den Akt des Verstehens selbst zu ergründen. Dahinter steht ein experimentelles Schreibverfahren, das nichts im Voraus davon weiß, was es darstellerisch bedeuten will. Es geht vielmehr darum, einen poetischen Klangraum aufzufalten, wo epistemologische Möglichkeiten (und Unmöglichkeiten) absichtsfrei entstehen und verworfen werden (können). Vor allem geschieht das, wie ich in meinem Vortrag zeigen möchte, durch eine performative Komik, die den Text immer wieder vorartikulatorisch (z. B. durch undeutliches Reden oder Homophonie) oder gestisch (z. B. durch Schnitte im Material oder Tonfallvariationen) unterbricht.

8. Deutsche und japanische Substantivzusammensetzungen im Vergleich Simon Oertle

Substantivzusammensetzungen (jap. 複合名詞) sind in beiden Sprachen ein hochproduktives Mittel der Wortbildung. Während im Deutschen nur drei morphologische Haupttypen von Substantivkomposita vorkommen (N+N, V+N, A+N; N = Nomen, V = Verb, A = Adjektiv), wobei N+N-Komposita weitaus am häufigsten sind, sind im Japanischen zusätzlich auch Komposita vom Typ N+V, V+V, A+V, N+A, V+A und A+A mindestens teilweise Substantive. Demotivierte Komposita, die im Bewusstsein der Sprecher nicht mehr segmentiert und als Komposita wahrgenommen werden, sind im Japanischen sehr viel häufiger als im Deutschen. Mit seiner beträchtlichen Anzahl Kopulativkomposita (Koordination) weist das Japanische einen Kompositionstyp auf, der im Deutschen verschwindend selten ist.

Die Kompositaforschung sowohl in Bezug auf das Deutsche als auch in Bezug auf das Japanische ist umfangreich, doch die kontrastive Studie von IWASAKI/NITTA/SENGOKU (1987[1984]) vergleicht die Wortbildung beider Sprachen nur in großen Zügen und behandelt die Bildung von *Kango* (Wörter chinesischer Herkunft) nur am Rand und sehr kurz. Während für die deutschen N+N-Komposita detaillierte semantische Klassifikationen vorliegen, ist in der Forschung zu den japanischen Komposita keine vergleichbare Konzentration auf diesen einen Kompositionstyp auszumachen. Dies liegt zweifellos daran, dass - so lautet meine Hauptthese - die japanischen 複合名詞 ein (noch) komplexeres und (noch) umfassenderes Phänomen als die deutschen Substantivzusammensetzungen darstellen.

口頭発表：語学Ⅱ (14:30~17:05) D会場 (E402 教室)

司会：宮下 博幸・吉村 淳一

2. 談話標識 *Weißt du was?* に関する歴史語用論的考察
— 説教集, 戯曲, 小説, 映画における話しことばに注目して

本発表は、16世紀から現代に至る(疑似的)話しことばにおける用例を分析し、談話標識 *Weißt du was?* (*Wissen Sie was?/ Wisst ihr was?* [以下、*Weißt du was?*で代表させて表記])の機能変化を追うものである。考察に際しては、Schiffrin (1987: 25ff.)のディスコースモデルを援用し、観念(命題)の構造、行為の構造、やりとり(ターン交替)の構造、参加者の構造、情報の構造という視点で用例を検討する。

Weißt du was? は、元来は *Weißt du, was ich meine?* のように、*was* 文の内容を知っているかを問う命題的意味をもった(「観念の構造」)が、次第に、聞き手の注意を喚起し(「行為の構造」)、話し手がターンを保持して(「やりとりの構造」)、聞き手に未知の情報を伝える(「情報の構造」)談話標識として使用されるようになった。1740年～1909年までの文学作品を調査してみると、戯曲20作品(全36例)および18・19世紀の36作品の小説の会話部分(全48例)で、「注意喚起」(46例)のほかに、話し手が聞き手に「提案を行う」用法が確認される(38例)。18世紀末の Adelung はこのような談話標識としての用法に気付いており、「新しいことまたは予期せぬことを予告する一般的言い回し」(Adelung 1798: 1581)という辞書的記述を行っている。現代の映画の台詞を見てみると、「注意喚起」と「提案」の用法の他に、口論・喧嘩の場面で *Weißt du was?* が使用される事例が目にとまる。つまり、*Weißt du was?* は、Schiffrin (1987: 14-20) の概念を援用すれば、従来は「語りの」(narrative)のディスコースにおいて用いられていたのが、現代においてはさらに「議論の」(argument)ディスコースでも使用されるようになり、話し手の「苛立ちの表明」という行為を導入する談話標識として機能を拡大させたと考えられる。

3. ドイツ語の完了助動詞選択

藤井 俊吾

フランス語等の多くの印欧語と同様に、ドイツ語には完了形を構成する際に *haben* と *sein* という二つの完了助動詞の選択が存在する。一般的に、大部分の動詞は *haben* を完了助動詞に取り、*sein* を完了助動詞に選択するのは移動や状態変化を表わす自動詞のみと説明されるが、どちらの意味も表さない *begegnen* や *sein*、そして対格目的語を取りながら *sein* を選択する傾向のある *durchgehen* などの例外が存在することが知られている。先行研究では、統語論に基づく非対格仮説による説明(Grewendorf 1989)や意味論による説明(Diedrichsen 2002)など様々な提案が為されたが、こうした例外を上手く処理することが出来なかった。本発表では議論の対象を自動詞に絞った上で、基本的には Zaenen (1993)と同じく、完了形を構成する際、主語が担う Agent Properties と Patient Properties の競合関係に基づいて完了助動詞が決定されるという立場を採る。まず始めに *begegnen* や *kollidieren*, *treffen* などの衝突・遭遇の動詞の取る主語が Ackerman & Moore (1999)の提案した TELIC ENTITY として実現した際に *sein* を完了助動詞に選択することを観察する。その上で、Agent Properties や前置詞句及び分離動詞の前綴りによって実現する Patient Properties が文中での意味に基づき完了助動詞選択に影響を及ぼすのとは異なり、動詞自体の働きによって実現する Patient Properties は実際の文の意味にかかわらず一定に完了助動詞選択へ影

響を与えることを確かめる。また、完了助動詞選択は Zaenen (1993)の主張する様な Agent Properties と Patient Properties の個数の多寡によってではなく、これらの助動詞選択に与える影響の強弱によって決定づけられていることも論じる。対格目的語を取る動詞に関しては今後の研究の課題とする。

4. ドイツ語形容詞 *egal* における総称性 —与格の生起をめぐって

井口 真一

本発表の目的は、与格の生起という観点からドイツ語形容詞 *egal* における総称性を考察することにある。Krifka et al. (1995) によると、総称文 (generic sentence) には種指示の名詞句による総称文と一般特性を表す文があるとされる。ドイツ語の形容詞 *egal* は判断者を表す項が与格で現れうるが、本発表ではまず *egal* が与格と共起するのは (1) のように特定の個人や集団が経験主として読み込まれる場合であり、(2) のような一般的特性を表す総称文においては与格が生起しない傾向にあることを示す。

- (1) Kindern ist es ziemlich **egal**, ob die Sonne scheint oder der Regen prasselt - sie wollen etwas unternehmen.
- (2) Bei Kündigungen ist es **egal**, wie alt ein Mitarbeiter ist, ob er Familie hat.

また、gleich などの類義語と比較することにより、*egal* には判断者が語彙的に読み込まれており、このことから判断者が頭在化しない場合には総称的に解釈される傾向にあることを主張する。さらに *egal* における与格出現のメカニズムが、他の与格支配の形容詞におけるそれとの関連でどのように位置づけられるのかについても触れてみたい。

5. 主語と文域 —二重判断・単純判断の視点から

藤縄 康弘

ドイツ語の標準的な統語理論によれば、定動詞第2位文 (V2 文) で文頭を占める主語は、中域から移動したものと考えられている。これに対し本発表は、一部の V2 文 — すなわち単純判断文 — において、文頭の主語が中域に残留する可能性を主張する。

現代ドイツ語の命令文 (Hilf mir doch ein bisschen!) と希求文 (Lang lebe München!) は、その主語の性質に鑑みると、Marty (1916) が提唱し、Kuroda (1972) が日本語のハとガの相違に関連して再評価した「二重判断」と「単純判断」 („kategorisches Urteil“ vs. „thetisches Urteil“) の別を体現している。また、おおむね二重判断を示す平叙文も、強勢的な指示代名詞を主語とすれば (DER hat gelacht), 単純判断文をなす。これら3種の文を比較すると、基本的に二重判断文である平叙文・命令文と常に単純判断文である希求文との差異は、～ハ型の主語を文頭位置に置けるか否かに帰着することが分かる。つまり、～ハ型主語を前域に受容する構造のみが、二重判断文をなし得るのである。

以上を総合すると、単純判断文をベースとし、そこに二重判断文を可能にする仕組みとしての定動詞移動、かつ・または話題化・非焦点化による構成素移動という拡張

が加わると考えるのが妥当であろう。この場合、ベースの単純判断文は、たとえ見かけ上は V2 文で具現しても、その定動詞は、補文化詞と競合する位置（左文枠）にあるのではなく、中域中の主語と動詞句との境界位置（左動詞枠）を占めるのである。

口頭発表：ドイツ語教育 / 文化・社会 (14:30~17:05) E 会場 (E403 教室)

司会：羽根田 知子・福岡 麻子

5. ドイツ語母語話者・学習者間の多人数インタラクション — 「聞き返し」と発話の協働構築プロセス

星井 牧子

外国語学習にはインタラクションが重要であり(Mackey 2012), 習得を促進する「意味交渉」では「聞き返し」(Rost-Roth 2006)が中心的な役割を担うが、教室内の外国語学習場面では、IRF を典型とする教師主導型のインタラクションが多い(Edmondson/House 2011)。近年 ICT を用いた *tellecollaboration* が盛んではあるものの、多人数参加型のテレビ会議場面の言語使用に関する調査は、まだそれほど多くない(Bahlo et al. 2014)。

本報告の分析対象は、ベルリン・フンボルト大学と早稲田大学間で 2014 年度に実施した計 7 回のテレビ会議で、質問場面の発話を中心に調査した。参加者はドイツ語母語話者 6 名とドイツ語学習者(B1 レベル) 5 名の計 11 名。Rost-Roth (2006) の分類を元に質問を機能別に分類し、発話者と受け手についても分析した。こうした観察の結果、「聞き返し」では母語話者・学習者間のインタラクションは対称性を示し、「聞き返し」や「気づき」では他の学習者からの「助け船」も多いなど、対称性を持つインタラクションと「意味交渉」および「気づき」を促す協働的な発話の場が可能になっている。

上記の分析結果を元に、ドイツ語教育における多人数参加型テレビ会議および多人数インタラクション場面における学習者の言語使用に関する調査研究方法とその可能性について議論したい。

6. ウィーン工房の初期デザイン — 異質なものの文化的摂取, 混交, 排除の一例として

高井 絹子

イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動を源流とする世紀転換期の汎ヨーロッパ的な応用芸術運動は、各国の市民階級が自らの階級にふさわしい生活スタイルと住空間を模索する動きと捉えることができる。

ウィーン工房はウィーン分離派のメンバーでもあったコロマン・モーザーとヨーゼフ・ホフマンを中心に 1903 年に設立される。工房初期作品にはアーツ・アンド・クラフツ運動とマッキントッシュらグラスゴー派の影響が強く見られるが、彼らと分離派

メンバーを仲介していたのは、工房の初代資金提供者、実業家であり美術愛好家でもあるフリッツ・ヴェルンドルファーであった。

工房初期の直線と平面、幾何学模様を特徴とするデザインに対しては賞賛ばかりでなく、これを異国趣味だとして激しい批判を行う人々もいた。コロマン・モーザーが離脱すると、工房は実質的統括者ヨーゼフ・ホフマンのもとで「ウィーンスタイル」の名にふさわしいデザインを求め方針転換を行い、結果として「モダン」な工房初期デザインは数年で姿を消す。

この時期、ヨーロッパ各国のあいだでは芸術家や建築家を中心に人的交流は積極的に行われていたが、工房など生産母体の製品には製作者側の意思とは別に地域的な独自色が求められることが多々あった。ウィーン工房の初期デザインの変化をその一つの現れとして提示する。

7. アドルノにおけるハイネ像

—「知識人」としての自己理解という観点から

橋本 紘樹

テーオドル・アドルノは、二度の講演を通じてハインリヒ・ハイネについて論じている。1948年にロサンゼルスで行われた「ハイネの再評価に向けて」、そして1956年にケルンで行われた「ハイネという傷」がそれにあたる。先行研究では、現代における詩作の可能性を問うことがハイネ講演の主題であるという指摘や (Olschner, 2008)、文化産業下での叙述のあり方をめぐるアドルノ自身の問題意識がハイネに投影されているという指摘がなされている (Hohendahl, 2008)。しかし、そこでは両講演間の差異と時代状況との関係が問題にされていない。

ロサンゼルスでの講演ではハイネは肯定的に評価されているが、ケルンでの講演では「傷」という側面が強調されている。アドルノがケルンで講演を行った当時の西ドイツは復古主義的な傾向が顕著であった。そして、「文化と精神へのエリート主義的な使命」を重視し、戦前に力を持っていた「マンダリン」と呼ばれる学者たちが再び勢力を強めていた (Krohn, 2011)。そのような時代状況のなか、芸術性という観点から、ハイネの詩には懐疑的なまなざしが向けられていた。また「マンダリン」は、ドレフュス事件で誕生した、公的に知的批判を行う「知識人 (Intellektuelle)」という概念が戦後ドイツに浸透することを妨げる要因でもあった。

本発表の目標は、このような両講演の差異と時代状況に着目することで、アドルノの西ドイツでのハイネ講演が当時の知的状況への批判的介入を意図したものであったことを明らかにし、アドルノの「知識人」としての自己意識を浮き彫りにすることである。

8. ナチズムは「アジア的」行為か

—歴史家論争 30 年、アジアからの再考の試み

渡辺 将尚

1986年の「歴史家論争」から本年でちょうど30年になる。ナチによる大量虐殺の比較可能性をめぐって展開された本論争については、これまでさまざまな研究が行わ

れてきたが、いずれもノルテの主張の荒唐無稽さや、ドイツの過去の罪に対する不誠実さ、さらには時のコール政権のイデオログ的側面ばかりに焦点が当てられてきたと言ってよい。

本発表の目的は、これまで分析の対象とされることのなかった、ノルテの主張そのものがはらむ問題をあぶり出すことである。その際注目するのは、彼が用いる『『アジア的』所業』という用語である。彼は、ナチが大量虐殺等の『『アジア的』所業』に及んだのは、自らもソ連による同様の暴力行為の危険にさらされていると認識していたからだと主張する。たしかに、ヒトラーも度々この「アジア的」という語を用いている。しかし、ヒトラーにおいてその語は、「アーリア人」の対極にある「ユダヤ人」あるいは「共産主義」を意味する。つまり、ナチの行為を「アジア的」と言っているのは、何よりノルテ自身である。

もちろんここには、残虐行為の根源をヨーロッパの外、つまり「アジア」に求めることによって、ナチズムの罪を過小評価しようとする欲望が関与している。しかし、ノルテがナチズムを擁護しているように見える理由はそれだけではない。彼は、ナチズムについて語るはずの文脈において、同時に当時の西独の様子を事細かに描き出す。そこから見えてくるのは、まさにナチ国家とは正反対の「去勢された」西独の姿である。ノルテが本当に語りたいのは、ナチズムの無害性でも、犯罪の過去が「過ぎ去らない」ことでもなく、彼にとって到底満足のいかない同時代の西独の位置づけだったのではないだろうか。

ブース発表 III (16:00~17:30)
(ブース発表は途中での出入り自由です)
F 会場 (E205 教室)

Das Image des Fremdsprachenunterrichts bei Deutschlernenden am Beginn des ersten Studienjahres

Carsten Waychert

Zu Beginn des Sommersemesters führe ich in meinen Deutschkursen des ersten Studienjahres schriftliche Umfragen durch, mit denen ich einerseits die studentischen Vorstellungen über den Fremdsprachenunterricht, andererseits die Erwartungen an den gemeinsamen Deutschunterricht untersuche. Der Forschungskontext hierbei sind empirische Arbeiten zum (kommunikativen) Deutschunterricht in Japan, die die Meinungen der Lernenden analysieren: quantitativ z.B. der JDV (2001) sowie die JGG (2015), qualitativ-explorativ z.B. Boeckmann (2006), Schart (2005 & 2013) sowie Waychert (2016a & 2016b).

In meinen beiden Aufsätzen von 2016 wurden bereits u.a. die Ergebnisse verschiedener Fragen zu den allgemeinen studentischen Vorstellungen über den Fremdsprachenunterricht (z.B. "Was ist für Sie guter bzw. erfolgreicher Unterricht?" "Was ist für Sie schlechter Unterricht?") vorgestellt.

Aber die Frage nach dem Image des Fremdsprachenunterrichts, den die Deutschlernenden am Beginn ihres Studiums haben, wurde dort noch nicht

berücksichtigt, da deren Auswertung im Mittelpunkt einer gesonderten Untersuchung steht und im Jahr 2017 als wissenschaftlicher Beitrag an der Deutschen Abteilung der Fremdsprachenhochschule Kyoto veröffentlicht werden wird.

In meiner Kabinenpräsentation möchte ich die Antworten von 293 Wahlpflichtstudierenden am Fachbereich der Kultur- und Literaturwissenschaften der Ritsumeikan Universität sowie die von 75 Germanistikstudierenden der Fremdsprachenhochschule Kyoto anhand verschiedener Hauptkategorien (z.B. positive/negative/ambivalente Gefühle) vorstellen.

ブース発表 IV (16:00~17:30)
(ブース発表は途中での出入り自由です)
G会場 (E204 教室)

ICT 総合ドイツ語学習環境について
—海外研修での活用と多言語化の試み—

川村 和宏・竹内 拓史・松崎 裕人

本発表で取り上げる学習環境のうち「初学者向けドイツ語学習ソフトウェア」については本学会で以前ブース発表を行っている。そこで、本発表では Android および iOS アプリ版の「学習ソフトウェア」、「ドイツ語表現辞書ソフト」、「簡易版ドイツ語 web 辞書」、「ドイツ語多読リスト」を合わせた初学者向けの「ICT 総合ドイツ語学習環境」の開発状況と実際の運用について報告する。

上記学習環境は、初修外国語の授業時間数減少に対応するため学生の学習を補助するコンテンツの充実をはかり作成したものである。本発表では、それぞれの内容や実際の運用について紹介した後、海外研修でこれらを活用した事例を紹介し、議論したい。

近年「グローバル化」への対応として、海外研修や海外留学への参加者数を増加させることが求められている。しかし、学生生活の多忙化や学生の経済的負担なども考慮すれば、短期の海外研修への派遣学生を増やすことが現実的な対応とも考えられる。ところが、インターンシップを含む就職活動の長期化等に伴い、高年次では海外研修への参加すら困難となり、結果として研修を低学年に設定せざるを得ない状況がある。それにも拘わらず初修外国語の授業数が減少するという現状において、ICT コンテンツが海外研修の現場で果たすことのできる役割について議論したい。

最後に、初学者向け学習ソフトウェアを多言語化する試みとしてのロシア語版アプリの開発と運用状況について紹介したい。

第2日 10月23日(日)

シンポジウムV (10:00~13:00)

A会場 (E601 教室)

Architektur als Gestaltungsprinzip des Imaginären
in Literatur und Kunst

Moderator: Thomas Pekar

Architektur bzw. Baukunst stellt ein fundamentales Medium dar, welches die menschliche Alltagswelt gestaltet und in welchem Gesellschaftsordnungen ihre symbolische Gestalt gewinnen. Darüberhinaus interagiert Architektur als ein solches kulturelles Leitmedium eng mit anderen Medien und Künsten. Seit dem spatial turn, der topologischen bzw. raumkritischen Wende seit Ende der 1980er Jahre, hat sich die Literatur- und Kulturwissenschaft, etwa unter Begriffen wie „Bauformen der Imagination“ oder „Text-Architekturen“, verstärkt den kulturellen, ästhetischen, inszenatorischen und performativen Funktionen des Architektonischen zugewandt. Hier eröffnet sich ein weites Forschungsfeld, auf dem das Symposium in Hinsicht auf die Frage nach den Zusammenhängen zwischen der Architektur und der modernen deutschsprachigen Literatur und Kunst situiert ist. Es ist ein seit der Antike geltender Topos, dass Bauen und Schreiben oft in einem Analogieverhältnis zueinander stehen. Nicht nur sind in der Literatur selbstverständlich Architekturbeschreibungen zu finden oder es werden solche Beschreibungen in poetischen Architekturimaginationen vorgestellt, sondern Architektur wird auch zum metaphorischen Paradigma, z.B. für die „Bauformen des Erzählens“ (E. Lämmert). Ebenso ist der umgekehrte Weg zu beobachten, dass aus Literatur Architektur hervorgeht (wie z.B. die Umsetzung von Paul Scheerbarts poetischer Imagination einer Glasarchitektur durch den Architekten Bruno Taut zeigt). In dem Symposium wird die Architektur besonders in dieser Grenzstellung zwischen dem Literarisch-Imaginären und dem Architektonisch-Realen und weiter in ihrer Fundamentalstellung als literarisch-kulturelles Ordnungsprinzip überhaupt thematisiert. Die geplanten Vorträge befassen sich mit unterschiedlichen Aspekten und Konstellationen dieses Zusammenhangs: Aus einer interkulturellen Perspektive des europäisch-japanischen Vergleichs wird zunächst der Frage nach einer möglichen kulturrelativistischen Verortung von Architektur als eines solchen gesellschaftlich-ästhetischen Leitmediums nachgegangen. Als symbolische Gestaltung politischer Machtansprüche, als inszentierter Größenwahn, wird über architektonische Projekte und Bauten des Nationalsozialismus gesprochen; dieser architektonische Inszenierungscharakter wird sodann an einem ganz anderen Beispiel, nämlich an der Gestalt von Speisesälen und Esslokalen und ihrer literarischen Thematisierung, verdeutlicht. Dem durch Architektur strukturierten Verhältnis zwischen Realem und Imaginärem gilt eine weitere Fragestellung, nämlich die nach der Funktion des Kellerraums in der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur.

Ein Beitrag zur Verwendung des Glas-Materials in der urbanen Architektur und zu literarischen Glas-Fantasien wird das Symposium beschließen.

3. Der (Un-)Wille zur Architektur. Kōjin Karatani über Wittgenstein und Christopher Alexander

Walter Rupprechter

Nach der Publikation des *Tractatus logico philosophicus* 1921 hat Wittgenstein ein paar Jahre als Volksschullehrer in Niederösterreich und danach als Mit-Architekt am Haus für seine Schwester in Wien gearbeitet. Der japanische Philosoph Kōjin Karatani sieht in diesen beiden Tätigkeiten mehr als einen zufälligen biografischen Zusammenhang, er sieht darin ein praktisches Präludium zu seiner späteren Philosophie, in der Wittgenstein Fundamentalkritik am europäischen Rationalismus übt. Das Lehrer-Schüler-Verhältnis bilde ebenso wie das Verhältnis zwischen Architekt und allen Mitbeteiligten am Bau eine asymmetrische Kommunikationsstruktur, eine Kommunikation mit dem Anderen, der nicht die gleichen Regeln teilt, und die mithin der Kontingenz ausgesetzt sei. Der „Wille zur Architektur“, der ein Wille zur Konstruktion sei, und nach Karatani die europäische Philosophiegeschichte präge, eliminiere diese Kontingenz im Zeichen der Rationalität. Doch in der Gegenüberstellung des metaphorischen Architekturbegriffs Platons mit dem realen in Wittgensteins oder Christopher Alexanders Tätigkeiten zeige sich, dass Kontingenz in der Kommunikation nicht aufhebbar sei, und dass sie gerade erst die Bedingung einer Begegnung mit der Andersheit des Andern schaffe.

4. Imaginierter Glanz und flüchtiges Zuhause. Speisesaal in der Großstadtliteratur des 20. Jahrhunderts

Kikuko Kashiwagi

In der architektonischen Entwicklung der modernen Großstädte sind die beiden entgegengesetzten Richtungen zu beobachten, denen die Großstadtmenschen jedenfalls im Alltagsleben ausgesetzt sind. Einerseits hat man es mit einer neuen Ästhetik zu tun, die z. B. die Neue Sachlichkeit als zeitgenössische ikonoklastische Bewegung proklamiert und die eine durch neue Materialien ermöglichte Neuartigkeit bejubelt, andererseits findet man doch die traditionelle, feudalistische, genauer gesagt pseudo-aristokratische Ästhetik, die sich das prosperierende Bürgertum dank der materiellen Preissenkung leisten kann. Als gesellschaftlicher Ort avancierte der Speisesaal vor allem im wachsenden großstädtischen Leben in den zwanziger Jahren zum beliebtesten Schauplatz der sozialen Öffentlichkeit. Die mit neuerer Bautechnik ausgestatteten Esslokale sind die gesellschaftliche Bühne, wo physische Bedürfnisse mit den sozialen Wünschen korrespondierten. Um dies zu beobachten bietet der Roman von Irmgard Keun „Das kunstseidene Mädchen“ ein besonders interessantes Beispiel aus der Perspektive der „Neuen Frau“ in Berlin. In dem Vortrag werden auch Erich Kästners Roman „Fabian“, in dem es um einen männlichen Großstädter geht, und Vicki Baums Erfolgsroman

„Menschen im Hotel“ herangezogen.

5. Architektonische Macht im Nationalsozialismus

Thomas Pekar

Insbesondere die Gebietsverluste, die Deutschland nach dem verlorenen Ersten Weltkrieg auferlegt wurden, waren in konservativ-nationalen und später nationalsozialistischen Kreisen Anlass, um ein grundsätzlich klaustrophobisches Raumgefühl zu propagieren, welches in Hans Grimms 1926 erstmals erschienenem Roman „Volk ohne Raum“ auf zwei wesentliche Punkte gebracht wurde, nämlich a) auf die Vorstellung „Lebensraum“ zu benötigen und b) auf die Vorstellung, dass die „Großstadt“ Inbegriff der „Raumnot“ und „Enge“ sei. Die erste Vorstellung des „Lebensraums“ wurde insbesondere in der Zeit der 1920er Jahre durch die sogenannte „geopolitische Schule“ (Ratzel, Haushofer) entwickelt, die starken Einfluss auf Hitler hatte, der ihr Ideologem vom nicht ausreichenden deutschen Lebensraum mit seinem Antisemitismus verband. Dieses nationalsozialistische Raumkonzept bildet den Hintergrund für meinen Vortrag. Wesentlich wird es in ihm um die zweite Vorstellung gehen, dass Großstädte, wie z.B. Wien oder Berlin, Inbegriff der „Raumnot“, „Enge“, des Jüdischen und der Rassenmischung seien. Der destruktive Impuls diese so radikal abgewertete Großstadt zu beseitigen, fand bei Hitler in der Weise Gestalt, dass er sich als „Baumeister“ imaginierte. Im Vortrag wird es um das wichtigste und in Ansätzen auch verwirklichte Baumeisterprogramm Hitlers gehen, nämlich um das städtebaulich-architektonische Projekt der Nord-Süd-Achse, einer geplanten Prachtstraße im Herzen Berlins.

6. Weinen und Onanieren im Keller. Aspekte eines architektonischen-poetologischen Chronotopos in der Gegenwartsliteratur

Hiroshi Yamamoto

Seit langem schon wird die literarische Konstruktion in Analogie zur architektonischen gedacht. Im fortschrittssüchtigen 19. Jahrhundert stand der Turm im Vordergrund, dessen „unzählige Einzelteile“ ein „harmonisierendes Ganzes ergeben“ (Goethe) sollten.

Als Gegenentwurf zu diesem Panoramablick wird in der Gegenwartsliteratur besonders dem Kellerraum große Aufmerksamkeit geschenkt, wie z. B. bei Günter Grass in "Die Blechtrommel", Thomas Bernhard in "Der Keller" und Wolfgang Hilbig in "Die Weiber", in "Heizer" oder auch in "Ich". In der modernen Literatur fungiert der Untergrund wie z. B. im Werk von Dostojewski oft als geistiges Refugium für die ‚abgetauchten‘ Intellektuellen.

Bei Grass erscheint er auch als ein Ort des unterdrückten kollektiven Gedächtnisses, wo die Deutschen der Nachkriegszeit erst beim „Häuten der Zwiebel“ kathartische Tränen weinen können. Bei Hilbig überschneiden sich verschiedene Zeit- und Bedeutungsebenen wie die chthonische Vorstellung aus der Mythologie, die historischen Erinnerungen an die letzten Kriegsjahre im Bunker

und die erotisch-regressive Sehnsucht nach der Gebärmutter. In diesem Chronotopos verschmelzen “räumliche und zeitliche Merkmale zu einem sinnvollen und konkreten Ganzen” (Bachtin). In meinem Referat sollen unter besonderer Berücksichtigung auf sein kompositorisches Prinzip die labyrinthischen Züge des untergründigen Chronotopos analysiert werden.

5. Architexturen der Transparenz. Glas als Material einer urbanen Moderne

Michael Wetzel

Dass Städte wie Zeichensysteme lesbar sind, ihre Bauten wie Buchstaben sich zu einer Botschaft fügen, ist seit dem 19. Jahrhundert feste Überzeugung eines Selbstverständnisses von Stadtkultur. Walter Benjamin hat diese Lesart in seinem „Passagen-Werk“ am Beispiel vom Paris als Hauptstadt des XIX. Jahrhunderts in allen ihren Dimensionen zu entfalten gesucht. In diesem Zusammenhang fällt zum ersten Mal die Konstatierung der konstitutiven Rolle zweier Baumaterialien: Eisen und Glas, beides Gußmaterialien, die ungeahnte Formmöglichkeiten erschließen. Glas fasziniert vor allem aber durch eine Doppeleigenschaft von Abschirmung und Transparenz. Die von Benjamin genannten Beispiele sind die Passagen selbst mit ihren gläsernen Dachkonstruktionen und Vitrinen, die Kaufhäuser mit den neuartigen Schaufensterkonstruktionen. Immer wieder geht es um die spiegelnde Durchdringung von Innen- und Außenraum im städtischen Gefüge, das gewissermaßen buchstabiert wird nach der Dialektik von Separation und Sichtbarkeit.

Die großen Architekten dieser Idee waren (vom Expressionismus bis hin zum Bauhaus) vor allem Bruno Taut (mit seinem avantgardistischen „Glashaus“ von 1916) und Mies van der Rohe. Sie waren beeinflusst aber auch von literarischen Anstößen und künstlerischen Phantasien.

シンポジウム VI (10:00~13:00)

B会場 (E602 教室)

心態詞はなぜ使われるのか？

—心態詞の出現する状況と認知—

Warum verwendet man Modalpartikeln?

Situationen und Kognition

司会：田中 慎

全体説明：岡本 順治

現代言語学の視点で心態詞 (Modalpartikeln) が注目され始めたのは, Arndt (1960), Krivonosov (1963), Weydt (1969) からである。これらの研究では, それぞれロシア語との比較, フランス語との比較が行われた。心態詞は, その実態がよく分からず翻訳が難しい一方で, 「話し手の心的態度」という理解可能な共通項が直感的に把

握できたため、注目を集めたといえる。折しも 1970 年代からの語用論の隆盛に伴い、その機能が見直され、発話行為論や会話分析の中で頻繁に議論された。

しかし、Arndt (1960) からすでに 50 年以上経過した現在でも、なぜそもそも心態詞が使われるのか、という根本的疑問に明快な説明はない。その理由は、心態詞が会話分析や発話行為論の中で、広い意味での会話不変化詞 (Gesprächspartikeln) や談話小辞 (Diskurspartikeln) の中に位置づけられ、語用論的機能のみが強調されるあまり、その本来の特徴がほとんど分析対象にならなかったからである。

心態詞そのものの研究が新たに注目されるようになったのは、Abraham (1995) を契機として統語論的研究が始まったことによる。その後、Zimmermann (2004)、Coniglio (2009)、Müller (2014) が発表され、心態詞の語順、意味論、組み合わせの研究が注目されるようになった。他方、Gutzmann (2014)、Abraham (im Druck) で議論されている Verumfokus との関係、Ikoma (2007)、Ikoma/Werner (2011) のようなプロソディーと関連する研究も始まった。

当研究に直接関係するアプローチは、Gast (2008)、Abraham (2010, im Druck)、König (2010)、Okamoto (2011, im Druck) などで、話者の心的態度だけでなく、状況依存性、仮想聞き手モデル、知識のアップデート、共有知識等が考察されている。本シンポジウムは、このような認知的研究の一環で、なぜ心態詞がそもそも使われるのか、という問いに答えようとするものである。大菌は、そもそも「心態詞はどのような状況で、どの程度使われなければならないのか/使われなくてもよいのか」という問いから実証的に日独比較を行う。宮下は、心態詞が使用される理由を、話し手・聞き手の知識状態に対する感情のコード化に見る。岡本は、「驚き」に関係すると言われるドイツ語の心態詞と日本語の終助詞を比較しつつ、それらが聞き手に心を読ませるための補助手段でしかないと主張する。

1. 心態詞の義務性をめぐって — 実証的アプローチ

大菌 正彦

本発表では、本シンポジウムのテーマを、日本人ドイツ語学習者の立場から言い換え、「心態詞はどのような状況で、どの程度使われなければならないのか/使われなくてもよいのか」という問いを設定したい。この問いに答えるためには心態詞の使用実態を、日本語と対比しつつ把握する必要がある。

心態詞をめぐると日独対照についてはすでに相当の蓄積があるが、本発表で明確にしたいのは、両者（日独対応表現）の義務性の異同である。たとえ機能が類似していたとしても、両者の定着度ないし義務性が異なるのであれば、両言語には何かしら根本的な（類型論的？）相違が存在する可能性がある。

以上を踏まえ、本発表では、1. ドイツ語の心態詞の使用状況を、機能的に類似する日本語の終助詞や構文などと対比しながら、頻度とともに示す。2. その際、複数の翻訳やメディアを調査対象とすることにより、同じ状況で心態詞が使われている場合と使われていない場合を抽出し、上の問いに対し実証的に答えていきたい。3. 同時に、これまで蓄積されてきた心態詞の意味（機能）についての議論に対し、日独対照の観点からどのようなことが言えるのか、さらに議論を深めたい。

なお、本発表は理論的な側面を掘り下げようとする他の二人の発表者に対し、実証

的な側面から議論のための基盤を提供しようとするものである。

2. 心驚詞の感情伝達機能 ―心驚詞とその生起環境の分析

宮下 博幸

心驚詞は従来の研究では発話行為を修正する機能や、命題態度の表示の機能 (Bublitz 1978, Doherty 1987, Thurmair 1989), また近年では話し手・聞き手の知識に関わる状況をコード化する機能を持つとされてきた (König 1997, Fischer 2007, Gast 2008)。本発表は心驚詞には知識処理機能に加え、知識状態に対する感情をコード化する働きがあり、それが心驚詞の重要な機能の一つであると論じたい。心驚詞の感情的機能は Helbig (1990) においては、心驚詞の付随的機能として「関心」「驚き」「非難」などの形で記述されているが、これらは一般に語用論的に生じる意味と考えられ、心驚詞の機能の一部とされることは少なかった。本発表ではまず Ekman (2003) や Russel (2008) などの感情心理学の研究を概観しつつ、心驚詞の感情的機能について考察する。引き続き先行研究において心驚詞が必ず出現するとされる環境と、心驚詞が出現すると不自然とされる環境、会話資料や映像資料において心驚詞が出現する環境とそうでない環境とを比較することで、心驚詞が出現する際には感情に関わることを示す。さらに例示的にいくつかの心驚詞を取り上げ、心驚詞がどのような意味で感情の伝達に関わる機能を有すると言えるのかを示したい。

3. 「驚き」に関する心驚詞と終助詞の比較 ―心を読ませるための手がかり

岡本 順治

従来、心驚詞 *aber, vielleicht, ja* は、V2 感嘆文、V1 感嘆文に用いられ「驚き」を表す機能があると説明されてきた (Weydt 1969, Helbig 1988, Thurmair 1989 など)。(1) では、*aber, vielleicht, ja* が使われ、(2) では、*ja* は用いられないが、やはり「驚き」を表すとされる。また日本語でも、(3) における終助詞「ね (え)」は、「軽い詠嘆・驚き」を表すと言われている (伊豆原 1992, 橋本 1992, 金井 2004)。

- (1) Der Kaffee ist *aber/vielleicht/ja* süß!
- (2) Siehst du *aber/vielleicht/*ja* schlecht aus!
- (3) しかしでも、このウナギはうまいねえ。

そもそも「驚き」とは何なのか。「驚き」とは、生理的反応であると同時に、〈話し手が、期待に反する知識を状況から得たことを、聞き手に訴えかける調整行為〉でもある。本発表では、このような視点からドイツ語の *aber, vielleicht, ja*、日本語の「でもしかし…ねえ」に関してもピッチと持続時間の関与が「驚き」表現の主要な部分を担っており、心驚詞や終助詞は、聞き手に当該発話がある種の「驚き」表現であることを読ませる手がかりとして働いているにすぎない、と主張する。

シンポジウム VII (10:00~13:00)
C 会場 (E603 教室)

時代を映す鏡としての雑誌
—18 世紀から 20 世紀の女性・家庭雑誌に表われた時代の精神を辿る
Zeitschriften im Spiegel des Zeitgeistes
—Die Frauen- und Familienzeitschriften vom 18. bis zum 20. Jahrhundert

司会：桑原 ヒサ子

本シンポジウムは、時代精神と深く結びついた雑誌というメディアが、いかに時代に影響を与え、また逆にいかにそれぞれの時代の潮流の影響下にあったのかという相互作用を明らかにすることを目的とし、雑誌揺籃期の 18 世紀から第二次世界大戦後の 1950 年代頃までの家庭雑誌・女性雑誌を中心に検討を加える。

まず第 1 発表では、18 世紀の道徳週刊誌の流れを汲む『アマーリエの休息时间』を取り上げる。個人の人格陶冶について様々な議論が展開されたこの時代に、同誌では女性のそれを家庭という私的領域に限定したが、それによりかえって実現可能な自己陶冶の局面が提示されることになったという積極的評価を試みる。

第 2 発表は啓蒙時代の教養・娯楽雑誌が大衆化した 19 世紀最大の家庭雑誌『ガルトテンラウベ』を扱い、それまで教養の蚊帳の外に置かれていた小市民層が、社会の進歩とドイツ統一に希望を膨らませた後、社会構造の変化により生じた不安の中で「平和な牧歌的世界」に逃避し、後のフェルキッシュ運動につながる精神風土が準備されていく過程を明らかにする。

第 3 発表で取り上げるのはナチスのエリート女性集団「ナチ女性団」の機関誌『ナチ女性展望』である。この雑誌はプロパガンダだけでなく、家事や育児などの実用的情報や娯楽的要素などグラビア女性誌と共通する記事を多分に含み、それが読者獲得につながっていた。そしてナチスのイデオロギーが「母」を理想とし、女性の居場所を家庭としたことを逆手にとって、女性運動を展開した彼女たちの社会進出とその限界を考察する。

第 4 発表からは戦後の雑誌がテーマとなる。まずドイツ民主共和国の人気週刊誌『Wochenpost』の家庭欄を取り上げる。労働力不足に苦しんだ DDR において、女性の社会進出は表向き歓迎されていたものの、1950 年代の記事では女性の伝統的役割が依然として強調されていた。しかし 50 年代末以降、家事の担い手としての女性を描く傾向が格段に弱まったことに注目し、そこに表れた、東ドイツにおける戦後について考察する。

第 5 発表では、1948 年創刊の西ドイツの女性雑誌『Constanze』に注目する。1950 年代のドイツ連邦共和国では保守化が進み、女性に「子供・台所・教会」という女性「本来の」役割への回帰が促された。しかしこの女性誌でそのような女性の役割が直接的に喧伝されることはほとんどなく、むしろあらゆる商品を「幸福」という記号に変換しながら、物質的豊かさと幸福をイデオロギー的に結合する。この一見非政治的に見える誌面に潜む政治性が指摘される。

各発表で取り上げられる雑誌のターゲットは女性や家庭だった。彼らは時代のメイ

ンストリームからは外れた存在だったが、その数は時代を経るにつれ増大し、時には社会の流れに大きな影響を与えることもあった。女性・家庭雑誌を通史的に検討することにより、そこに現われる時代精神に対する雑誌と読者の相互関係を明らかにしていきたい。

6. 貞節と理性 —マリアンネ・エールマン『アマーリエの休息時間』が提示する女性の自己陶冶

北原 寛子

ドイツ語圏社会における雑誌と家庭との、とりわけ女性との関係史を考察するにあたって、本発表では『アマーリエの休息時間』(1790-92)を取り上げる。この月刊誌はスイス出身の作家・編集者マリアンネ・エールマン(1755-1795)によって創刊され、1793年以降はコッタ社の『フローラ』に継承された。エールマンの雑誌は、18世紀の道徳週刊誌の流れに位置付けることができる。

エールマンの著作のみならず、ラ・ロッシュなど同時代の女性文筆家の業績に関する従来の研究では、女性が主体的に情報発信を行った活動それ自体については積極的に評価する傾向があるものの、男性を中心とする社会のあり方に従順であることによって女性の価値を高めようとする姿勢が批判の対象となっている。確かにヘルダーらの人格陶冶論においては、他者への従属や教育内容に制限を設けるべきだという意見はなく、その点でエールマンの提示する女性像は時代の限界を超えるものではない。

しかし男性を念頭に置いた人格陶冶論が無限の彼方に自己を成長させることを目指すことは輝かしく思えるが、一方では目的達成の可能性も無限に延長されており、憧れと同時に劣等感をも喚起する可能性がある。それに対してエールマンが貞節と理性を重んじたことは小さな努力目標に過ぎないが、確実性が高い。彼女の雑誌は女性の自己陶冶を中心に訴えつつ、同時に他の男性を編集者や読者に取り込み、堅実と実直という市民的価値観拡大に貢献したといえる。

7. 『ガルテンラウベ』 —大衆化する活字メディアとその「政治性」

竹田 和子

本発表で扱うのは、1853年創刊の『ガルテンラウベ』である。この雑誌の創刊目的は、3月革命の失敗により萎縮した市民を癒やし、自信を取り戻させることだった。主要購読者層はそれまで教養の蚊帳の外に置かれていた小市民の家族で、彼らは連載小説や挿絵を交えた分かりやすい記事に、今日のテレビを見るように熱中した。

大衆向けの娯楽雑誌というイメージから、詳しく論じられることの少なかったこの雑誌だが、1870年代までは3月革命の自由主義的理想を色濃く残し、「のどかな田園風景」という今日のイメージとは異なる一面も持っていた。長年待ち望まれたドイツ統一が達成されると、読者は熱狂し、自らに対する自信を深めたが、それに合わせるかのように、同誌は明らかに楽観的な進歩主義を取り、安らぎの場である家庭における女性の役割を強調しつつも、女子教育の重要性も求めた。

この雑誌が保守化と図式化を強めたのは、特に1880年代に入ってからである。それは産業の発展による社会構造の変化にさらされた人々の不安と結びつく。批判的読

書習慣を持たない多くの読者は、家庭雑誌が提供する「平和な家庭」、「美しい故郷」という牧歌的仮想世界への逃避に終始し、雑誌の側も読者の求めに応じて単純な図式的表現を提供し続け、後のフェルキッシュ運動にもつながる精神風土を準備したのである。本発表では1890年代までの『ガルテンラウベ』の変化を追い、この過程を明らかにしたい。

8. 『ナチ女性展望』 *NS Frauen Warte* —女性による女性のための雑誌

桑原 ヒサ子

『ナチ女性展望』はナチスのエリート女性集団「ナチ女性団」の機関誌として1932年7月に創刊された。この雑誌は、全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンクに率いられた官僚組織の女性局ともいえる「全国女性指導部」の第5部門「新聞・雑誌・プロパガンダ」から刊行された。ここには女性カメラマンを抱える女性だけの編集部があり、その制作は「女性による女性のためのメディア」だった。読者は主に中産階級の女性である。

紙面は、ナチ女性団の運動や活動記事に留まらず、家事やファッションなどの実用的情報、連載小説や映画・書籍の紹介などの娯楽的要素を含む、20世紀以降のグラビア女性雑誌と変わらなかった。まず、読者獲得に効果を上げた実用ページを見ると、世界恐慌後の困窮の時期、そして後には第二次世界大戦開戦後の配給制の中で、読者は雑誌から有益な情報と知恵を獲得できたことが分かる。

その一方で、ナチスのイデオロギーは「母」を理想の女性像とし、その居場所を家庭と定めていた。『ナチ女性展望』も官製雑誌として、「母親」像を前面に出している。しかし、イデオロギーが「母」を強調すればするほど、ナチ女性団にとっては、「母」を切り札に、女性の地位向上に資する事業を実現することが容易になった。「民族の母」をスローガンに、家庭に留まることなく女性運動を展開した彼女たちの社会進出とその限界を『ナチ女性展望』から考察する。

9. フォーラムとしての家庭欄

—東ドイツの人気週刊誌『Wochenpost』にみる女性像の変遷

重野 純子

1949年に建国されたドイツ民主共和国（以下DDR）では市民生活を無視した政策への不満が高まり、1953年6月17日に大規模な市民暴動が起こった。出版部数120万（同国内2位）を誇る人気週刊誌『Wochenpost』（1953–1996）の創刊号が発行されたのは、この暴動の起こった年のクリスマスのことである。DDRは建国から10年後の50年代末に若い世代の社会進出に伴い転換期を迎えたが、同誌においては古い価値観からの脱却の試みが観察される。

『Wochenpost』では外交、旅行、娯楽に関する記事や連載に並んで、家事や園芸、さらに教育や夫婦関係など家庭にまつわる幅広い問題を取り上げた家庭欄も人気を集め、ここでは積極的に読者に議論の場（フォーラム）が提供された。男女の平等を謳い、また労働力不足に苦しんだDDRでは女性の社会進出を歓迎・促進したにも

かかわらず、50年代の家庭欄において女性は家事や教育の担い手として登場し、“Hausfrau（主婦）”という言葉も頻繁に使用されていた。しかし1959年に夫婦関係や女性のあり方について疑問を呈する記事やこれに対する投書が掲載されると、言葉や画像で女性を家事の担い手として登場させる傾向は格段に弱まり、誌面に大きな変化が生じた。

本発表では、これまで同誌の研究において注目されてこなかった女性像に焦点を当てることで、一般誌における女性の地位と役割の捉え方と読者の反応の変化を探り、そこに表れた東側のドイツにおける戦後について考察したい。

10. 非政治性の政治性

—戦後西ドイツにおける女性雑誌 *Constanze* の誌面分析

横山 香

ドイツ連邦共和国の1950年代は、第二次世界大戦後の社会的安定と経済成長のなかで保守化が進み、女性にとっては、戦中・戦後の経済的・精神的自立から、3K（Kinder, Küche, Kirche）という「本来の」役割への回帰を促された反動的な時代であったと言われている。マスメディアはこのようなイデオロギー形成に大きな役割を果たすと言われているが、いわば「害のない」女性誌は、フェミニズムの立場からのいくつかの批判的な研究を除けば、たいていの場合、取るに足らないものと考えられてきた。しかしその非政治性は、非政治的であることを意味しているわけではない。

今回研究対象として、1948年に創刊され、戦後西ドイツの大衆文化の一大現象となった女性雑誌 *Constanze* を取り上げ、その誌面分析を示す。同誌はファッション・美容・恋愛・結婚・セレブリティ等の話題や、日常的・家庭的なトピックス、軽い読み物、そして広告で構成されているが、女性の役割を直接的に喧伝することはほとんどない。政治的・社会的な事柄とはほぼ無縁の誌面で見られるのは、あらゆる商品を《幸福》という記号へと変換しながら、読者に“heile Welt”という《理想》を提示することである。こういった非政治性における政治性こそが1950年代という時代の象徴であり、その後の高度資本主義社会のプロトタイプとなっていくのである。

シンポジウム VIII (10:00~13:00)

D会場 (E402 教室)

「人殺しと気狂いたち」の饗宴

あるいは戦後オーストリア文学の深層

Das Symposium unter Mördern und Irren
oder die Tiefe der österreichischen Nachkriegsliteratur

司会：前田 佳一

歴史学者 Rathkolb(2015)が述べるようにオーストリアは第二次世界大戦の敗者であると同時にナチスの第一の犠牲者でもあったゆえにその政治的・文化的スタンスにおいて多くの矛盾を抱えたまま第二共和国時代を迎えることとなった。この問題は現代オーストリア社会にも影を落としており、アウストロ・ファシズムの台頭やナチズムへの加担という過去の総括が不十分なまま出発した戦後オーストリア文学に関して同様である。終戦直後の文壇の出発点を担ったのは O・バジル、H・ヴァイゲル、H・v・ドーデラー等の旧世代の人間たちであり、新世代の作家たちの活躍も一時的にせよ彼らの庇護の下でのことであつたからである。つまり新しい文学の可能性もある種の保守性において醸成されたのであり、T・ベルンハルトやE・イエリネク等のオーストリア社会の偏狭さを批判することで名声を得た 20 世紀後半以降のオーストリア文学もまた、上記旧世代作家たちの影響圏に存すると言える。I・バッハマンは 1961 年の短編『人殺しと気狂いたちのあいだで』においてこの旧世代の延命と復興ならびに戦後オーストリアの社会・文化の欺瞞を批判的に主題化しているが、本シンポジウムはこの短編にちなんだ表題の下、「戦後の旧世代」の戦前からの作品や言説を分析することを通じ、以下の四つの問いに取り組む。①戦後オーストリア文学の出発点はいかなる矛盾の内にあつたのか。②オーストリアの過去やその社会の保守性をその批判者達や犠牲者達の視点ではなく、保守的オーストリア像の擁護者達あるいは加担者達の視点から捉えた時、見えてくるものは何か。③戦後の文壇の出発点を担ったのが旧世代の人間達であつたとすれば、戦後オーストリア文学の基本的特徴は既に戦前から準備されていたのではないか。④現代においてなお「オーストリア文学」なるものがあるとするならば、それはどのように条件づけられているのか。

山本はウィーン大学独文科の 19 世紀から 20 世紀前半までの状況と 1930 年代以降の独文科において中心的な役割を果たした J・ナードラーの文学史記述を概観した上で、オーストリアにおける『ニーベルンゲンの歌』受容史を批判的に検討する。桂は R・ムーゼルに端を発し、戦後も影響力を保持し続けることになる「カカーニエン」をめぐる 1920 年代以降の言説の推移を考察する。日名は 1920 年代以降幅広い領域において活動した L・W・ロホワンスキーが戦後に行つた文学雑誌編集における「オーストリア文学」再編の試みのありようを明らかにする。前田はドーデラーの 1930 年代から 40 年代までの諸テキストにおける過去のオーストリア像の文学的構築とその戦後オーストリア社会における受容の問題点を検討する。

発表後の討論では四つの発表において扱われなかつた作家も含めた 1920 年代から 50 年代までのウィーン文壇の批判的検討も行う。

5. オーストリアにおける「ドイツ国民叙事詩」研究 —『ニーベルンゲンの歌』の「オーストリア性」

山本 潤

ロマン派による中世の再評価を背景とし、神聖ローマ帝国解体を経て解放戦争に至る時期のドイツ語圏のナショナリズムの興隆と軌を一にする形で、『ニーベルンゲンの歌』はドイツにとっての「国民叙事詩」と認知された。しかしその「国民叙事詩」たる所以は、国民国家の歴史や建国譚としての内容ではなく、ルネサンス以来のタキトゥス研究を踏襲し、作品の基底をなすとされるゲルマン＝ドイツ民族の精神的本質に

求められた。そうした中、オーストリアでのニーベルンゲン研究は、同作品の内包するオーストリアの土着性を強調する方向へと向かう。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』はオーストリア人による詩作とみなされ、また中世盛期の西方からのロマンス語による文芸の影響を押しとどめ、ドイツ民族の文学的伝統を保持したのがオーストリアであるとの主張がなされたのである。こうしたオーストリアでの大ドイツ主義的・民族学的な『ニーベルンゲンの歌』の理解は、J.ナードラーの提唱する民族学的文学史観のもとで一つの結実を見る。またウィーン大におけるニーベルンゲン研究の第一人者D.v.クラークの戦後の著作は、戦前からのニーベルンゲン観の連続性を示唆している。本発表は、オーストリアにおけるニーベルンゲン研究の独自性の解明および戦前・戦後の比較対照を行うことを通し、オーストリアのドイツ文学研究の戦後の出発点の一端を明らかにすることを試みるものである。

6. 「この時代」の文化批判 —ムージルの「カカーニエン」とアウストロ・ファシズム

桂 元嗣

ムージルの「カカーニエン」は、現在ではテキストの文脈を離れ、ハプスブルク帝国への郷愁や中欧文化圏を言い表す語として定着しつつある。しかしこの語は本来『特性のない男』に登場する文学形象である。ムージル自身はオーストリア文化を「一度も実証されたことのない空論」と呼び、オーストリア文化を実体化させようとするヴェルフェルらに第一次世界大戦以前から一貫して蔓延する「時代の症候」の典型を見てとっている。「カカーニエン」をロマンの中で形象化するムージルの文学活動の根底には彼の文化批判がある。この点をヴェルフェルの『世界の黄昏』の序文やそこに収められた短編「喪中の家」と、ムージルのエッセイおよび『特性のない男』を比較しつつ明らかにする。時代を超えて存在する「出来事の幽霊的なもの」の内実をとらえようとするムージルの文化批判は彼をいわゆる「オーストリア的現象」から解放したが、その一方で目の前の政治体制への批判的なまなざしを欠くことになる。ムージルは講演「この時代の詩人」やファシズムからの文化擁護のためのパリ国際作家会議で芸術活動の自立を唱えるも、その一方でオーストリアでの執筆活動継続のためにアウストロ・ファシズム政権に年金支給の嘆願書を出し、その過程で祖国戦線に加入する。その意味でムージルも彼自らが批判する構造に絡み取られている。この点を指摘したうえで「カカーニエン」が文学形象である意義を考察する。

7. 訪れない「戦後」

—L. W.ロホワンスキーによるオーストリア文学再編の試み

日名 淳裕

L.W.ロホワンスキーは今日、1920年代のウィーンを代表するキネティックアートの理論家としてわずかに言及されるのみである。しかしその出発点は故郷シレジアの方言文学の編纂(1912)と詩集『宵、朝、正午』(1919)の出版であり、幅広い活動の中心には常に文学があった。1938年のオーストリア併合後には執筆禁止に処され、ユダヤ系の妻をめぐるナチス福祉局との対立もあって、1940年に地下組織オー

ストリア自由運動に参加している。

1945年にウィーンが「解放」されると、ロホワンスキーは戦後文学の表舞台に返り咲き、『アガトン年鑑』(1946-1948), 『芸術』(1946-1948), 『文学の世界』(1946-1947)の編集者としてオーストリア文学の再編に尽力した。その際、同志 O・バジルの『プラン』が新世代の組織に意欲的であったのに対し、ロホワンスキーはあくまで自らを含む旧世代の復権に拘泥した。そうした姿勢は思想的に相容れない R・ヘンツや M・メルが関わったオーストリア文化連合の『トゥルム』との親近性を示すものである。

本発表はこうした問題意識の下に、ロホワンスキーによるオーストリア文学再編の試みを、上の三つの定期刊行物を例に検証し、オーストリア的「戦後」を拒み、文学による闘争の継続を主張したロホワンスキーに潜む否定しがたい保守性を論証しようとする。

8. ハイミート・フォン・ドーデラーにおける「間接的なもの」の詩学

前田 佳一

ドーデラーが 1940 年代に執筆し 1951 年に発表した長編『シュトゥルドルホーフ階段あるいはメルツァーと年月の深層』には物語内の現実の出来事が展開する通常の筋の次元とは別に非現実のメタファーの次元が存在するが、そのメタファーの次元は時に通常の物語の筋と並行する形で、時に両者が錯綜する形で、そして時には物語内の現実の出来事そのものがメタファー化されるという形で、常に現実の出来事と同等の潜勢力を有するものとして提示される。かかる特異なメタファーの使用法は 1947 年のエッセイ『間接的なものにおける無垢』や 1940 年から 1950 年までの日記『接線』において度々言及される「間接的なもの」(das Indirekte)の詩作における実践として解釈できるが、これは 1945 年に国家的・文化的アイデンティティを崩壊させられた形でスタートした戦後オーストリアにとっての古き良き（しかし実際には一度も存在したことの無い）「オーストリア的なもの」、そして自らのナチス黨員であったという過去、これら両方を擁護するために必然的に生み出された様式でもあった。そしてこの長編が戦後オーストリア文学を代表する作品として受容され、現代においても読み継がれているという事実は、ドーデラーの実践と様式を戦後のオーストリア社会の多数が自らに重ね合わせる形で無意識的にせよ是認したということの意味しうる。